

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十四卷

第六号



6

日本幼稚園協会

画期的な 新型積木

キンダー[®] 枠積木

幼児に与える積木の教育的意義は、単純・素朴な基本形体の構成の変化が、無限の世界をつくりだすところにあります。

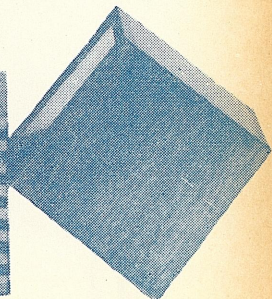
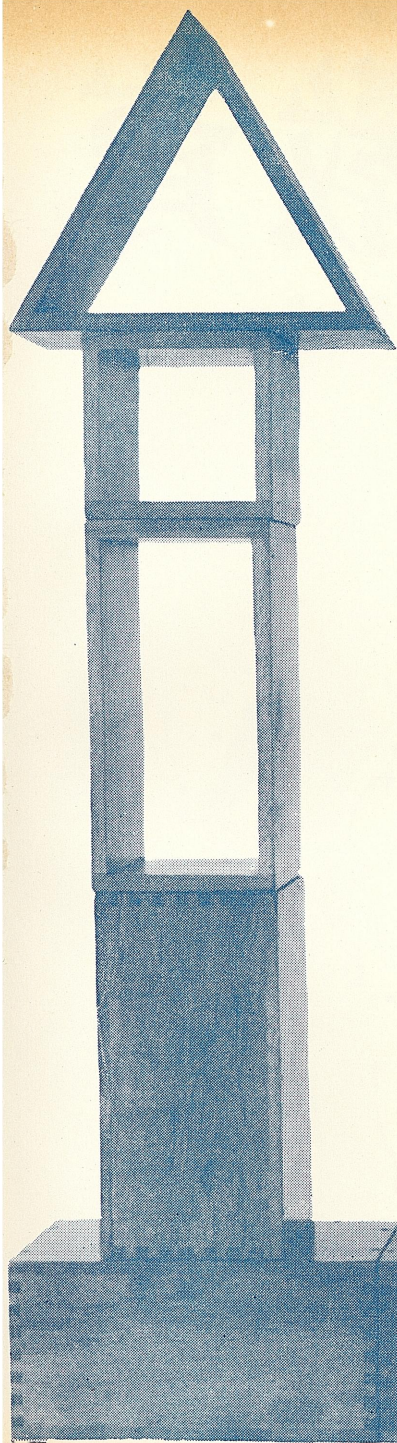
このキンダー枠積木は、これまでの基本形積木を写真のように枠型に発展させたもので、これによって積木遊びに空間性が組み込まれ構成的にも、感覚的にも広い分野がもたらされたといえましょう。いわば積木の革命ですが、こんな単純な原理が、いままでどうして考えられなかったか不思議なくらいです。

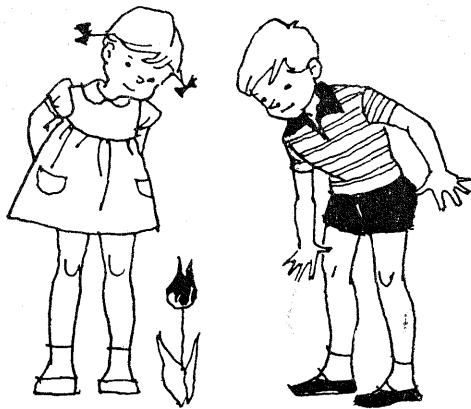
実用新案・意匠登録出願中／教具研究会推選
1セット／立方体10個・長方体20個・三角柱
10個・木箱入り 定価 8,000円



株式会社

フレール館





幼児の教育 目次

第六十四卷 六月号

表紙 水沢 決

一日の保育の流れについて……………坂元彦太郎(2)

幼稚園の一日……………お茶の水女子大学付属幼稚園

一日の保育の流れについて……………村井トミ(12)

三才児のある日難感……………富樫純子(20)

いろいろなながれ……………村田修子(29)

四才児の一日……………村石京子(35)

五才児一日の流れ……………堀合文子(44)

五才児の活動と教育内容の一環……………関治子(49)

☆五才児の記録……………磯部景子

堀合文子

津守真(55)

一日の保育の流れについて



坂 元 彦 太 郎

幼稚園などにおいて幼児を指導することを保育とよぶ、在来のならわしにしたがっていえば、ある一日に、どういう種類や形の保育をつぎつぎに展開するのがいいのか、という問題が、その実際家にとっては、最初の基本的な問題であり、そして、最後の問題もまたここにおちつくであろう。この問題をさまざまな論点からとりあげて、私見を述べることにしたい。

一、「一日単位」の教育の仕方について

もともと、学校のような教育機関における一日の指導の流し方、

こどもたちにどんな活動をつぎつぎにもたせたいか、ということとは、幼稚園以外の学校でも、最も重要な問題の一つであるはずである。ところが、実際には年令の長じたこどもたちの場合、たとえば高等学校や大学などのレヴェルになると、主として教師や教室の便宜からの時間の割りふりにとどまって、生徒の心身の状態などをほとんど考慮にいれていないのである。このような風習が、わが国では小学校にまではいりこんでいて、いわば一週間を単位とした時間割なるものができているのである。一日のことについては、せいぜい、午前中の頭のいいときに算数などを、午後には音楽・体育などをやるといったことを考えるくらいにとどまっている。わが国では、小学校でさえ、「教育の単位」(ことはが少しおかしいが)を一

日としないで、一週間や一学期などとする風習になっている。戦後、小学校で算数を何パーセント、国語を何パーセントといったのは、実は、一日の学習時間の割りふりについてだったのであるが、やはり、わが国の風習にしたがって、一週の授業時数なり、一年の授業時数の配分のことになってしまったのである。

このような、時間割を一週間単位に組み、個々の時限の配列は主として教師や教室の便宜によってきめる、というやり方は、幸運なことには、わが国の幼児教育界を占領することはできなかった。むしろ、このような考え方が絶えず幼児教育界をもおびやかして、その余波の影響を受けることがないものであるが、主流はこういうやり方にはおちこまなかったのである。この点が、わが国での、幼児教育が小学校などちがっている重要な点の一つであるときえ、いえるであろう。むしろ、これは、対象の幼児自身の幼さからくるものではあろうが、やはり、この教育関係者の良識にもとづいていることを否定できないであろう。

こうした線は、新幼稚園教育要領にもそのまま受けつがれていると、見ることができよう。同要領のいちばん終りにでてくる「指導計画作成上の留意事項」の(5)、(6)をみても、一日の指導計画については特に具体的に説いてあって、それが指導の計画をたてる上のいちばん手近な基礎的なことであると解することができるであろう。むしろ、「年、月などにわたる長期間の指導計画」もたいせ

つであり、教育を計画的、意図的にいとなむためには是非必要なことであるが、計画というと、ともすると長期のものの方によりつよく関心をひかれるのは必ずしもぞましいことではない。これには、教育の単位をより長期のものと考える、上級の学校流の考えが影響を及ぼしている、とみられないこともない。両方ともたいせつであるが、いずれにしても、長期の計画に不当にうき身をやつすのは、いきすぎであって、もっと具体的な実問題として一日の指導に目を向けることが、少なくともより現実的であるといえるであろう。

そしてこうした一日一日の指導が積み重なって、園の全体の教育が成り立つのであることはいうまでもないことであるが、こと「教育の計画」というような問題になると、大きな組織や体系に気をとられて、足もとにあるその日その日のことをかろんじるような人がでてくるのである。端的にいえば、ほんとに現場の教育に熱心であり、こどもたちに深い愛情をもっている人たちは、こういう動きにおちいるものではなく、何かの誘因でそのように傾きかけても、内心ではどうしてもおだやかでない感じをもちつづけるものである。

このように、一日を単位に保育のことを考えるというのは、つまりは、一日の間における幼児のもろもろの活動が全体としてつり合いのとれたものでありたい、ということである。すなわち、できるだけ、幼児の実情に応じ、そして必要なさまざまな活動が展開され

て、さまざまな教育的なねらいが調和的に達成されるようでありたい、というのである。人間の食事の場合には、できるだけ毎回の食事において必要な栄養素がそれぞれ質的にも量的にもバランスがとれているのがぞましい、とされているようである。この食事における毎食に当る単位が、園の生活においては、一日がこれに当ると考えるのが適当ではなからうか。

むろん、食事の場合でさえ、絶対に毎食がバランスがとれていなければいけない、とはいえないであろう。だいたいいいのであって、その前後のときに、欠けているところを補うことができれば、実際上は差支えないであろう。保育の場合でもそうであって、毎日の保育が厳密にバランスがとれていなければ絶対いけないのだ、とはいえないであろう。一日だけみれば、ある種の活動にかたよっていたり、ある方向のねらいが強すぎてしまうこともあろうが、いつかどこかで、そのつぐないができればいいわけである。

しかしながら、考えてみると、やはり、保育の場合には、毎日毎日欠かすことのできない最低の必要な活動があるのも、事実であろう。幼児の保育は、上級の学校のように教科の知識を切り売りするようなものではなく、幼児の具体的な生活がそのままおこなわれているのを通じていとなまれるのである。便所にいくこと、からだを大きく動かして遊びまわること、あとかたづけをすることなどで、こういうことが園での教育の直接のまとなり、場面である。これ

らのものが幼児の一日の生活に欠くことのできないものであるのはいうまでもない。こうした最低にみても必要な、いくつかの活動などを含めて、一日のバランスのとれた指導をしなければならぬのであるが、園では、ただしぜんのままにまかせておくのではなく、より適当な環境や条件をつくって、より有効に、より有意義に生活をおくらせるように、しつらえるわけであろう。

二、のぞましい活動の選択について

ここで、新幼稚園教育要領から、一日の指導を計画するに当たって考慮しなければならないようなことから、抜き書きして一つの文章にしてみよう。これが、この問題についての問題点の概観になるとともに、一応の結論となることも予想されるのである。

「具体的な指導のねらいを明確にし、幼児の心身の発達に応じ、その生活経験に即して、各方面にわたる豊かな経験や活動を、かたよりなく、相互に関連し合うように配列し、調和や変化をもたせるようにする」

一日の幼児の生活を適切に指導するためにのぞましい活動を選ぶ場合に、その標準になる次のような三つの点をあげて説明することにしよう。

第一に、それらの活動が、それを通じて明確な具体的なねらいを達成することができるようになっていゝことである。そうしたねらいは、新要領が領域の中で示しているようなねらいを、場合や事情に応じていっそう具体化したものと考えることができであろうが、そうした各領域にわたるものねらいについて述べることは、ここではやめることにしよう。ところで、一般的にいって、いくつかのねらいがひとつの具体的な活動において、はっきり確定されると同時に、総合的に一体的に達成されるものである。「具体的なねらいを明確にする」とは、このようなことをいっているのである、ある固定した内容をはだかに露出して追求させることではない。幼児にとって身近な具体的なそれぞれの活動において、のぞましい教育的なねらいが、むりなく達成されること自体をいっている。と解していいであろう。

そして、いうまでもないことであるが、のぞましい各方面のねらいをバランスをとって実現できるような活動であり、いくつかの活動の連鎖であつてほしい。そのように、豊かな多面的な教育的なはたらきをもつように絶えず気をつけ、工夫することがたいせつである。

第二に、のぞましい活動とされる条件として、幼児の心身の発達の実情にあつた活動であるという点があげられる。年令などの点から見た発達のちがいがや、その外のさまざまな事情にもとづく個人

的な差に、できるだけ合ったような活動をもたせることがたいせつであるというのである。発達に合わせるということは、こともたちがしぜんにそうなつていくようにいかせるというだけではなく、ときには、そういう発達の段階やらそのときの事情やらで、ほつておけばそのようにはならないことで、実はもうそれが可能の段階のせとぎわまでできているのであつて、ちよつとした心づかいや仕組みでそこまで高めることができる——といったようなのぞましい活動もあるのである。そういうときには、まわりからそのような活動を誘発するような適切な刺げきや促進を与えることが、むしろのぞましいことである。心身の発達に應ずるといふのは、ただ幼児たちのあるがままにまかしておく、というばかりのものではない。といつて幼児にはまだどうしてもできないことを強いて押しつけることがのぞましくないのはいうまでもないことである。

第三には、そのような活動が、「幼児の生活経験に即する」ようでありたいという点である。のぞましいねらいに向かい、心身の発達に應ずるものでありながら、その幼児の普通の日常生活とむりなくつながり、その中に入りこむような活動であることがのぞましい。生活経験に即するというこゝばを、あまりにも狭義に解しすぎると、幼児がほつておかれておくる日常生活に現われるものばかりをいうことになるが、ここではそういうものばかりをいうのではない。ほつておいては経験しないであろうようなことで、少しばかりの

仕掛けや工夫でそれらを、あたかも日常生活の中で経験するのと同じようなしぜんさで経験できるようにするところの、意義のある活動をも含んでいるのである。こういうふうな活動でなければ幼児が好んで没頭することができにくいであろう。

以上あげた三つの条件の外に、その園のある地域社会の実情や、園そのものの実情に添うということなどをあげることができ、これらはむしろ自明なことであって、とりたてて説明するまでもないであろう。そして、ここに述べたことは、一般的に、幼児の園における指導のために必要有効な、のぞましい活動の選択についてであって、それがそのまま一日の幼児の活動の実質をきめる条件にもなっているわけである。

三、活動の形態や種類について

ところで、のぞましい活動を選択するに当って、以上述べたこととならんで、むしろ、それらとからまって、今一つの視点からみたことがあげられなければならない。それは、活動自身がさまざまな形態や種類をもっているのを、できるだけバランスをとりながら多面的に経験させることである。すなわち、「各方面にわたる豊かな経験や活動」を、かたよりなく経験させることである。

ここで、活動の「形態」といっているのは、新要領で「遊びの形態」といっているのに大体あたるであろう。これは、新要領で「幼児が自ら選んで行なう経験や活動」「グループで行なう経験や活動」「学級全体で行なう経験や活動」と活動を分類しているが、これらは形態からの分類であると解することができよう。ここで形態といっているのは、便宜的に、幼児の活動が個人・集団との関係においてとるあり方をいっているのであって、そういう意味での、個人的な、小集団的な、あるいは学級的な活動を区別し、それぞれにそれぞれの価値を認め、それぞれを適切に経験できるように、あらせたい、というのである。

世間では、「幼児が自ら選んで行なう活動」を自由遊びとよび、それをさせることを「自由保育」といい、「学級全体で行なう活動」をさせることを、「計画保育、課定保育、一斉保育」などとよび、この両者の対比や関係にひじょうに神経質になったり、どちらかと決定的に優れたものと定めようとする人たちが多い。また、「自由保育」に属する活動と「一斉保育」に属する活動とはっきり区別してみたり、それをもたせる時間をはっきり分けて、そのわくの中で保育を行なおうとするようなことが、よくあるのである。そして、「自由遊び」にはどのような活動がいいか、「一斉保育」にはどのような活動がのぞましいか、といった問題の提出をする人が多い。

これに対して、私はこういいたい。原則として、どんな活動をす

るか、ということが、このような形態をおのずから定めるものである、と。ある種の遊びは、その性格や中味の故に、しぜんに幼児が自由に選んで別々にするような傾きがあるだろう。しかし、また、それがしぜんに発展して小集団をつくってやるようになることもあろう。さらに、学級全体の活動にとけこんでいたり、それから発展してできたりすることもあろう。また、逆に、先生の伴奏で歌をうたうときに、幼児がみんな集まって（学級全体になることが多いであろう）するというのがしぜんであることも少なくないであろう。しかしながら、このように同一の活動を全幼児がいわば一斉にやることもあると同時に、実際には、学級全体の幼児が自由に絵を描くときのように、子どもたちはある点からは別々なことをしながら、学級全体として共通な方向にもむかっている、というような場合も多いことを見逃すことはできない。

したがって、学級全体で行なう活動を、すべて一斉保育とよぶのは、必ずしも当をえていない。そのとき、一斉とよんでふさわしい場合もあるが、同じように学級としてまとまった活動をして見えるときでも、活動の中味や性格は個人的な選択がつかったり、小集団的な活動が多く含まれていたりする場合も多いからである。

また、計画保育ということばもどうかと思われる。その口裏には、自由遊びは子どもたちがかってにやっている遊びであって、学級としてまとまってやる活動だけが、教師の計画的な指導の下にあ

るのだ、という考えがうかがえるからである。私どもにいわせれば、そのいずれもが、教師の意図的な指導の中にあるのが当然なのであって、ただ、教師が前面にでてつよく引き廻すかどうかのちに外ならない。適切に環境をととのえておいて自由な遊びを健全に展開させたり、教師が、個人的に、あるいは小集団の中でいっしょになって幼児たちと遊んだりするのも、まさしく計画的な指導の一種である。

私見をあえていうならば、幼児教育の場合は、幼児が一人ひとりで自己を発現するような活動をできるだけ多くもたせることがのぞましい。少なくとも、上級の学校の場合と比べれば、はるかにそうである。そのためには、それにふさわしい環境、施設や設備が具えてあることがのぞましいし、そういうことが可能になるような、暖かい精神的なふんい気がなければなるまい。

かといって、学級としてまとまって行なう活動にも、それなりの意義をもつことを、ここで詳述する必要はなからう。要は、こうした両面の活動を、幼児の実情などに応じて、適当なバランスをもって経験させることであろう。しかし、いま述べたような設備や施設がふじゅうぶんであったり、さまざまな事情から、自由に選んだ活動に没頭させる余裕が少ないような場合もありうるであろう。そのときには、次善の策をとるのもやむをえないことである。

いろいろ考えた上で、ごく大ざっぱに、この時間は自由遊び、こ

の時間は学級的な活動とわけて、しかしその中味についてはじゅうぶんそれぞれの活動の持ち前を發揮するようにして保育するのは、差支えないことであり、便利なことであろう。それをきゅうくつに固定的なものとししないで、弾力的に運営することがたいせつであるのは、むろんのことである。

次に、活動の種類と私がよんだのは、まず、新要領において「遊びの様式」といつているのに当たるといえよう。この場合は、新要領は、具体的にはそれを説明していないのであるが、実はいろいろなつかまえ方があって、わが国では一般に通用するようなとりあげ方ができていないからであろう。私も、私一流の分け方を試みてはいるが、(拙著、「幼児教育の構造」参照)ここで詳説するひまはない。しかし、具体的に、たとえば「積木で遊ぶ」「ままごことをする」「絵本をみる」などのようなあげ方をするのが、いちばん普通であろう。欲をいえば、これらを適切に分類してそれぞれの特徴をつかみ、それを活かしてさまざまなねらいをうまく達成できるようにやりたい。ごっこ遊びにしても、造形的な活動にしても、身体のリズム的な運動にしても、みな、それぞれにかけがえのない意義とはたらきとを具えているのであって、さまざまな種類の活動を工夫、駆使して、幼児にできるだけ豊かな経験をもたせることがたいせつである。どれか一方にかたよらないようにし、色どりの豊かな生活が展開できるよう、心がけていなければならぬ。

四、のぞましい活動の配列について

のぞましい活動の選択と配列とは、実は一体的におこなわれるものであって、それを区別して論述するのは、ただ分析的にとりだして論ずるのであって、便宜的なものにすぎない。常にこの二つの面はからまっていることを意識しながら、今度は、配列という面から考えていって見よう。

今まで述べてきたいくつかのことが、のぞましい経験や活動の「選択」のための原理であるとするのなら、これから述べるのは、その配列についての原理だということになるであろう。

新要領で、直接に配列に関して述べているところを摘記してつなぐと、次のようなことになるであろう。

「静的と動的、屋内と屋外、個人とグループなどのいろいろな経験や活動をかたよりになく」行わせるようにし「特に、活動と休息、緊張と解放などを考慮して、幼児の経験や活動に調和と変化とをもたせるようにすること」

これで、一応、のぞましい活動の配列についての基本的な考え方は明らかになっているといえるが、これらは幼児の興味を持続と転換、その心身の疲労などを考慮したものであろう。

ところで、二つの活動が前後にならぶ場合、すなわち、ある活動から他の活動へ移り変わるのを、大きく分ければ三通りの場合がある、と思われる。

その第一は、前の活動と後の活動とが中味において連続していたり、後の活動が前の活動からの何かの発展であったり、大きくみて一つのまとまった活動のうちの前の部分とあとの部分であるにすぎないものであったり、するような場合である。これらには、いわゆる「相互に関連し合っている」ような関係があつて、実質的に連続しているから、その移り変りは当然なこととされて、なめらかな転換がおこなわれるであろう。

その第二には、第一にあげた場合とは逆に、前と後の活動が何かの点で反対であつて、それであるが故にならぶという場合である。たとえば、緊張のつよい活動のあとに弛緩したものがつづいたり、戸外の活動のあとに室内の活動がおこなわれたり、はげしい活動的なもののおとにしずかな休息をもつてくる、といったように、適切におこなわれた場合には、それらが対照的であるが故に、かえつて変化と豊かさが生まれたり、心身の元気を回復させたり充実させたりすることになるであろう。こうした接続の仕方がたくみにおこなわれると、かえつて、なめらかにそして効果的につながることがしばしばである。

第三には、いま述べたような、前後の活動がはつきり連続的發展

的であるわけでもなく、また、対照的に対的でもなく、外見は相互に無関係であるように見えるものが接続する場合である。連続でも反対でもなく、いわば他人同志のようなものが、そ知らぬ顔でなればよくなるものである。木に竹をつぐようだ、といえはいるのであるが、それだけで結構無理なくつながることがあるのである。偶然にならべたものでふしぎとつながることもあるし、園の生活にある程度習慣的な軌道ができてその中でこうしたことがおこる場合に、少しも異和感を感じないことも多いのである。砂場で遊んでいて、時間がきたので、おべんとうにする、といったことはよくあることであつて、適切な配慮のもとに行なえば、全く無理なく遊べるのである。

園の保育を計画的組織的におこなおうというときに、右にあげたうちの、第一のような配列の仕方が中心的なものであつて、できるだけすみすみまでこのような接続ができるようでありたい、と願うのが普通である。こういう態度は、原則としてまちがいであらうはずはないが、園における一切の活動がこういう結び付け方だけですむとするのは、あまりにも狭い考え方である。第二、第三の種類のものが適切にまじつていて保育が成り立つのであり、そして、そのために、園の生活の豊かさをもちたらし、バランスのとれた活気にみちた生活をいとなませることができるのである。このような保育の仕方こそ、大きい意味で組織的計画的なのであり、「相互に関連し

合うように」というのも、広くこれらを含むものと解して差支えないのではなからうか。

五、一日の指導計画について

いままで述べてきたような仕方では、一日の指導を流すのがのぞましいというわけであるが、そのためにも、一日の指導計画をそのような趣旨でたてることがたいせつである。

ところが、一日の指導の計画がたいせつだ、ということばの意味をすりかえて、毎日に通用する定形の時間割をつくる必要があるのだ、というふうに見える人も少なくない。ごく大まかに、自由に遊ばせる時間と、学級でまとまって活動する時間とに大体わけて、それを臨機応変に、弾力的にいとなんていくのはわるいはずはないが、ずっと細分して固定的なわくぐみをこさえ、それが絶対不動のものであるかのように、墨守する、といったことになるのは、決してのぞましいことではない。

さらに、たて前として、一日の指導時間のわくぐみを先につくって、その中に幼児たちの活動をはめこむ、という考えには問題がある。さかさまに、ひとつひとつの活動のもつ性格や事情なりが、それらの前後や長短を決めるものである。この点は、「自由保育」と

「計画保育」とについてすでに述べたことと同じことが通用する。その活動の性格や事情なりが、どういう形態をとるかということとともに、その前後や長短をも決定するものである、というのが原則である。

しかし、現実には、幼児たちとの間に経験にもとずいた習慣的な軌道ができるようになると、ある程度のわくぐみをつくることも決してふしぜんではなくなるものである。

このことに附随して、活動の変りめの時刻をどの程度どのようにして知らせるか、がよく問題にされる。端的にいえば、小学校なみに、時限をこまかくくり、それをいちいち知らせ、幼児の生活を細分したわくにはめることは好ましいことではない。ある程度、大まかにくぎって幼児の生活の運行をなめらかにするのは、決してわるいことではない。どのくらいの長さにくぎるのがいいが、それをどう知らしたらいいかは、しよせん、さまざまな事情や教師の識見などによるもので、一概にいうことはできない。あまりにも神経質になって、幼児の活動の転換は全く知らず知らずの間に行なわれなければならないもので、外から時間をくぎったりすることはしてはならない、とまでいうのもいき過ぎであろう。大まかなくぎりを、レコードで知らせたり、口々によび集めさせたりするのもいいであろう。プザーやチャイムでも、使い過ぎない程度に使うのは、わるいとはいえない。

要は、幼児の活動をこまぎれにしたり、固定したわくにはめてしまふのではなく、大づかみにこどもたちの活動をまとめて、元氣と関心とを新らしくして、生活を充実できるようにしくんであげばいいのである。

さらに、一日の指導計画をたてるに際して、新要領が特に、「幼児の個人差にも適切に対処できるように考慮すること」と書き添えているのも見逃してはならないであろう。もともと、園での指導は幼児一人ひとりの特性に応じて一人ひとりを伸ばしていくことが本旨であり、端的にいえば、学級をつくったりすることもその方便なのである。ところが、指導計画といえは学級についてのことという通念がいつの間にかやられてきているようであるが、これは必ずしも正しいとはいえないであろう。やはり、考え方としては、一人ひとりに合った、一人ひとりを対象とするのが指導計画のほんとうの姿だ、と、考えて出発すべきであろう。

といっても、四十人の幼児をかかえて四十通りの計画をたてることは不可能であり、また不必要であろう。ある部分はほとんど大部分の幼児に共通点であろうし、ちがった個性や事情にも同じやり方でいい場合もあるであろう。そして、教師幼児たちが相互に馴れてくれば、ほとんど同じやり方でもまず差支えない、という事態も起こりうるであろう。したがって、一応、学級全体として共通な公約教のような計画をたてて、その都度数人の例外のことを頭におくよ

うにしておけば、間に合うことになるであろう。すなわち、特別な幼児に対する処置をあわせ考えた、学級としての計画をたてれば、実際的にはそれでいいということになるのである。

ある人たちは、主題もしくは単元と称して、相当長期にわたる経験のまとまりを計画して、その一つの環として日々の活動をしくむようにしている。そのこと自体をいいとかわるいとかはかんたんにいえないが、しかし、そういう場合に、気をつけてほしいことは、毎日毎日くりかえしてしなければならぬことや、こどもたちがしぜんの欲求にもとずいて、必ずしも主題には添わない活動をするなどなどを、むりに押しちぢめたり、無視したりしないことである。新要領で「各領域に示す事項を取り落しなく指導することができるよう配慮すること」と述べているのも、このことと関係があると思う。いわゆる単元に印した活動をつづけようとするあまり、かえって、ふしぜんな無理をあえてするようなことにならないようにしたい。

最後になったが、ある園にとつては、ある形式のわくぐみでよくても、それがその外の園には必ずしもそのままいいということにはならないこと、どんなにすぐれているように見える日案でも、外の園にはそのままでは通用しないものであること、いいかえれば、自分の園や組については、その実情と自分の識見とによって自分で決断するものであることを、述べておきたい。

幼稚園の一日

お茶の水女子大学附属幼稚園

一日の保育の流れについて

村井 ト ミ

う雰囲気や環境をこしらえ、誘導していこうかという点にあると思う。

教師の計画通りに、子どもが今、何をやっていようと、遊びの絶頂になっていようとおかまいなく、中断され、呼び集められ、心は前の遊びに残しながら、興味もなく一斉に次の活動をさせられるとしたら、しかも一日中、中途半端に——一年中こうして過ぎたとしたら——子どもにとっては、何とあわれなことであろう。

教師は皆、教育の目的をもっているから、自分の計画の通りに、ことを運べば楽である。

一応落ちこぼれの子もないし、しっかりと教育していたとしたら、こんな単純なことはないかも知れない。しかし、これでは集団の中で一人ひとりの指導、煎じつめれば、個の指導という点で、全くマイナスであろう。

集団の中で、一人ひとりの子どもを、それぞれに伸していくことこそ、大切であると思う。だから、この気持ちをよく考えると、一日の保育の流れについても、きちんと、きちんと時間割のように、うまく区切ってできないことになる。

そうだからと言って、教師は、もちろん無計画に子どものするま

「一日の保育の流れ」について書くようにということであるが、たとえば、入園当初のように、生活になれない子どもの管理上、大体一斉の行動をとるとか、何か行事のある日、またはお店ごっここの売り出しの日など、というように特別の状態の時は別として、ここではごく平凡な一日の流れについて記してみることにする。

私たちの「一日の保育の流れ」についての考えの基本は、今、この子どもたちが夢中になって楽しんでいる遊びや経験を、中断することなく、十分に満喫させ、しかもできるだけスムーズに、自発的に他の経験や活動にもっていくか（次の計画）——どうやってそうい

きょうは赤ちゃんのたんじょう日、たくさんたべてね。



まに放任しておくわけではない。だいたいいつ頃にはこれをして、いつ頃にはこうしてという大きな計画はもっていて、前の活動から次の活動に、強制的でなく自然に移していくという苦心が必要なのである。

× × ×

九時前後に「おはようございます」と子どもが入ってくる。この時からすでに子どもの保育は、はじまっている。

子どもは持ち物を所定のところへ置き、手を洗い、うがいをすませると、それぞれやりたいあそびに入っていく。昨日のあそびの続きをしようと意気込んでくる子どもあれば、眼にふれたその辺の遊具の中から遊びを見出す子どももある。早速にフランコへ、砂場へと出かける子どももある。

入園当初、いろいろの遊びを充分に知って、幼稚園の生活が板についたというか、自分のものになると、子どもはほとんど選択して活動をはじめ。昨年度私の受けもった組は三才児であったが、二学期の終り頃には、それぞれあちこちにグループができて、どんどんな力いっぱいあそんでいた。(まだ、はじめに遊びのきっかけをつくってあげなければならぬ子ども、一、二いたが)

だから、朝の中は一時間から、それ以上、まずやりたいことをさせて、十分に遊ばせた。だから子どものそろった頃に、せっかく始めた活動を中止して一堂に集会し、「おはよう」と、挨拶を交すことなど、あえてしないのである。



ブランコ、スベリ台、砂場、自動車、ままごと、絵本、積木、くみ板、くみ木、ブロックなど、いろいろのものをつくったり——男の子はラケットやバットを腰にさしたり、背中につっこんだりして、忍者や鉄人になったり、それがラケットに乗っていたり、女の子はバンビごっこや白雪姫ごっこ、誕生会ごっこなどに夢中になったり、いかにもおもしろそうだった。

それぞれ、あそびを満足した頃に（だいたい一時間以上たった頃）その日の次の計画をはじめた。

たとえば何かを製作するのを例にとってみるとする。

まず教師が机の上に、材料を運んだりしていると、その辺の子ども何人かが、何するの？と寄ってくる。そこで教師は、それについて話しながら、いかにも楽しそうにやりはじめたりすると、何してるのだろうか？と更にその辺の子どもが誘われて寄ってくる。そして自分も自分もと教師のまわりに集まってやり始める。だから、取材する内容が子どもに適するもので、子どもの興味のあるものであり、色とか材料が、やりたい衝動にかられるものであることも大切な要素となる）でき上った子どもは、それを持って庭へ出かけることもある。庭で遊んでいた子どもが、それを見つけて、自分もつくろうと部屋に入ってくる子どももある。それまでの遊びを満喫していれば、だいたい次第に部屋に集まってくる。遊びが絶頂ならば、もう少しこれをしてからと思うかもしれない。だから入ってくる時間には早い遅いの差はあるが、とにかく強制的でなく自分からやる

うという気持ちで入ってくるから、つくることも楽しんですることになる。

参加してくる子どもが、早い遅いがあることが、教師には、かえって一斉に大ぜいの子どもを指導するのではなくて都合がよい。七、八人から十人位の子どもが入れかわりに交換するので、かえって、一人ひとり指導もできるし、その子がどの位、工夫したり考えたり



「ケーキにアイスクリーム」「オトーフ」「先生たへてー」

してつくっているのか、あるいは自分から考えることができないで、人まねばかりしているか、とか、でき上りは不器用でも、あんなに、あの子なりに一生懸命努力しているのだななど、一人の子どもを、横の比較でなく、縦に通してみることもでき、いろいろと細かく知ることでもできる。

子どもから、子どもへの自然の誘導がなされない場合には、教師が、他であそんでいる子どもに、「先生たち、おへやで〇〇つくっているわね。あとでみんなもいらっしやいね」と声をかけておく。すると部屋で何をしているのか知らなかった——ということもないし、適当な時にやってくる。あまり大きな時間の差はない。たまには、砂あそびなどに夢中で、遂に入ってこない子どももいる。しかし、こういう時、よく考えてみると、その子が遅く登園し、まだ充分に遊んでいないのだと、うなずけることが多い。

そして教師としても、いつもいつもこの子が仕事に参加しないのならともかく、やる時には一生懸命にやるのなら、たとえ、今日は、やらなくともそんなに案ずることはないはずである。午後になって、やりたければやってもよし、明日の、ある機会にやってもよいのである。

ここでは、充分に遊んでから、次の活動に入ることを書いたが、必ずこの順序によってというわけではない。日によっては朝から机の上に材料を出しておくとする。「おはよう」と入ってきて、まずつくりたいと思う子、あ、これするのだなーと知って、だけど昨日の

続きのあれでまず遊んでからと思う子もあろう。だから遊びと仕事
が並行しているのであって前者の場合も、後者の場合も、意義は同
じことであろう。

ただ、このような指導では、教師が戸外で遊んでいる子どもの管



くみ木でロボットの使用マイクづくりに夢中

理を、どうするかということが問題になろう。
教師は室で指導していても、戸外のようなすが全部頭に、はいって
いなければならぬ。あそこは○のプラントで○のたちがあそんでいる。
——あの砂場は○のたちのグループが、おだんごをつくっていた



「ボク忍者だ エーイ」



ロボットもエネルギーがなくなって、
みな山のうえてパタリパタリ

から、まず大丈夫。山の上で鉄人ごっこをしている○○たちは、と
きどき見にいかないと、けんかが起らないとも限らないな——とい
うように……。

そして一番危険そうな所から、仕事のあいまをみて、さっさと見



『私おひめさま』 『私は小人よ』 ほんとになつたつもり

てまわることが必要であろう。

室内で仕事をしている子たちは、一ときも、先生がいなくては次
をどうしてつくっていくのかわからないようでは、教材が適当とは
言えないし、またいちいち先生のつくり方の通りつくるといふよう
な指導では困るわけで、自分で工夫したり考えたりしながら、教師は
ヒントをあたえたり一しよに考えてあげたりの指導をしていけば、
少しぐらい教師がいなくても、別に困らないのである。

また、自分の組の子というだけでなく、この時、戸外にいる教師
は幼稚園全体の子どもをみているわけであろう。幼稚園全体が、一
斉に仕事、一斉に遊びというのでないから、たいていどこかの組の
先生が戸外にもいる。

× × ×

このほか保育の内容にはいろいろある。テレビをみたり、お話を
聞いたり、リズムであそんだり、その他いろいろあろうが、前に記
した絵画製作の面などが、もっとも子どもの自発性を尊重した流し
方ができ易いものであろう。

たとえばテレビなどは時間が決まっているから、テレビの方で子
どもを待つてはくれない。生活している以上、当然のことであるか
らそれに順応しなくては時が過ぎてしまう。だから少し早目に知ら
せておく。リズムなども保育室でする場合は、あそびの中から機会
をとらえて——たとえば幼稚園ごっことか、誕生会ごっこなどから
自然にピアノをひいたりして次第に人数がふえていき、もっと広い

ところでいうことで机を隅にさせて発展していったりすることも度々である。内容がおもしろければほとんどが参加することにもなる。特にスキップはたいいていの子が大好きなので、これらをきつかけとしても効果があるようだ。



「モルモットさん、たくさんたべなさい。」

うちの幼稚園のようにたくさんの組があれば、自然に広いゆうぎ室を使用する日も決められている。(午後は自由だが)このように協同生活をしていく上に、人との関係、時間との関係上、現在していることを、やむなく中断しなければならぬこともでてくる。それとて、あまり興味の絶頂の時など(例えば、もう少しでトンネルが連らなり、水を流そうという時など、呼び集めるのは気の毒になり、先に行っていることを告げて、「それがすんだらいらっしやいね」といって他の子どもたちと先に行く。必ずといってよい位、少したつとやってきて仲間に入る。

十一時二〇分頃になると「おかたづけ」といって、あそんだあとを、全員が協力してする。お弁当になるからだ。これ以前の片づけは、必要によって、全員でなくとも、その場の子どもだけでする時もある。また、次の活動にさしつかえなければ——そのままにしておくこともある。また、かたづけをすることによって、次の活動への移りかわりがスムーズにいかなくなる場合や、気持ちの上で空間ができてしまう時もある。だから、その場その場の状況によって片づけなかつたり、または大ざっぱな片づけをしたり、または片づけなかつたり、適当に判断する必要がある。

手を洗い、くばられたお盆の上にお弁当の用意をして、皆でたのしくいたたく、おしゃべり専門にならない程度の楽しい会話をしながら、こぼさないように。すききらいしないでたくさんいたたく。すんだ子どもから、水はみがきの液で歯をみがき、しばらくは絵本

など静かなあそびをしてから、それぞれとび出していく。晴天の日はなるべく戸外であそばせるよう誘導する。

一時になると、レコードが鳴り、幼稚園中の子どもが庭に集まり、はとぼっほの体操をする。この時こそ、一日の幼稚園の生活のくぎりなので、どんなあそびも中断して、はせ参じる。体操のあとレコードに合わせて、庭や山を行進し、最後の片づけをする。砂場や、庭にもち出した玩具のかたづけを全員で協力してする。三才でも、はじめは種類の分類がやっとの片づけも、二学期の中頃より、つみ木や、くみ板なども、きちんと箱につめるのが楽しみになったようだ。

手を洗い、コート、帽子などできるだけ一人で着る。

さようならの挨拶をすませてから、一列にならび、玄関まで教師につれられ、一人ひとり、迎えの人（主に母親）に渡すのが、一時半頃。

以上のように、子どもの一日が終る。例は絵画製作にとつたが、その日の計画によっていろいろの内容が盛られるわけであるが、三才児なので、特に自由な遊びを主とし、他の内容は、あそびの一片として、はさんでいくという程度にした。

ここで大切なのは、自由あそびということであろう。勝手にただやらせておくというのではなく、自由あそびも大切な指導であるということ。それに没頭し、充分にあそびを楽しませるには、教師の

誘導というか、そこにかもし出す雰囲気というか、あそびを發展させる助言というか、教師もその中に入って心から遊び、活動しなければ、よい指導はできないということを、更に自覚しなければならぬと思う。

また、自由あそびをしている中に、健康の面、社会の面はもちろんのこと、自然の内容にも、たくさんふれる機会がある。

風車をまわして、こちを向いて走るとよくまわったという経験もあつたし、兎やモルモットに草をあげたり、山の途中たくさん、しも柱をふんだり、山の上の草の中に、春がきたことを知らずようにうす紫の花が咲いているのを見つけてよろこんだり——書けば、きりが無い。

つまり、「一日を楽しくあそばせる」という一つの目的の中に、いろいろの内容をこめて、自発性をもりたてながら、やっていくという方が、三才児には特に適切な言葉かもしれない。

そして、教師の中に計画はされていても、子どもの状態や、發展のしかたによって、または子どもの発案によって、変更したり、とりやめたりということは、よくあることであり、また大切なことだと思ふ。

一日の保育の流れについては、三才も四才も五才も皆同じだと思ふ。ただそこに現われてくる内容の種類や、程度や、量や、深さ、が違ふのであって、保育そのものの流れ方、精神は同じでなければならぬと思ふ。

三才児のある日雑感



富 樫 純 子

三才児と過したこの一年間をふりかえると、まず入園当初のあのあどけなかつた一人ひとりの幼児たちのめざましい進歩に驚くと共に、三才児なりに楽しく、充実した幼稚園生活を過すことができたであろうかということが反省される。

これから一年のうちの平凡なる日の状態を中心として記してゆきたいと思うが、この一日は特定の日でなく、一年なり一学期なり一週間の大きな流れの中の一日である。また動いている幼稚園の幼児の生活の一コマで、広い経験活動の一端である。

三才児の場合、あそびが最も重視されるもので、友だちと遊べることが、大切なねらいの一つであるので、自由あそびの部分に焦点をあわせて考えてゆきたい。この組は十五名で男児八名、女児七名で編成されている。

○六月中頃のころ

この頃は、幼稚園に安定感をもち、よく遊ぶようになってきたが、友だちといっしょに遊ぶようになったために、けんかが多い時期である。

かわりばんこにするとか、役割をかわりあって遊ぶという意味が、だんだんわかってきている幼児もいるが、まだ遊具の取りあい、順番を守らない、友だちに手を出してしまうことなどがある。教師のそばでなくては遊べない幼児も、また遊びのきっかけをつけてあげなくては、遊びに入れない幼児もいる。

教師と共にいろいろな遊びをしたりして、経験活動がだんだんに広くなる頃であり、遊具がきっかけで友だちと遊ぶこともあるのである。環境を整えることも大切である。

幼児たちは九時頃登園してきて、自由に遊ぶが、ある一日の九時三十分頃のあそびの状態を記録から見てみよう。

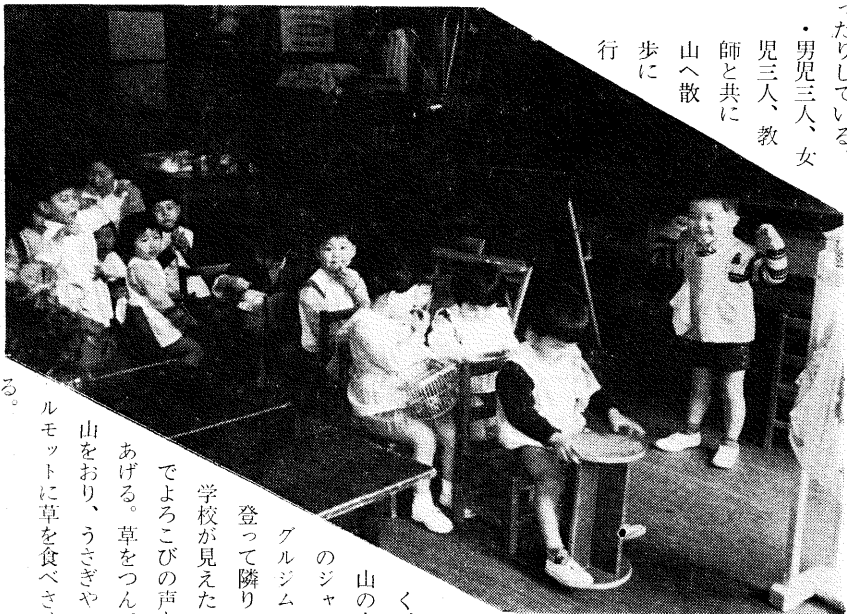
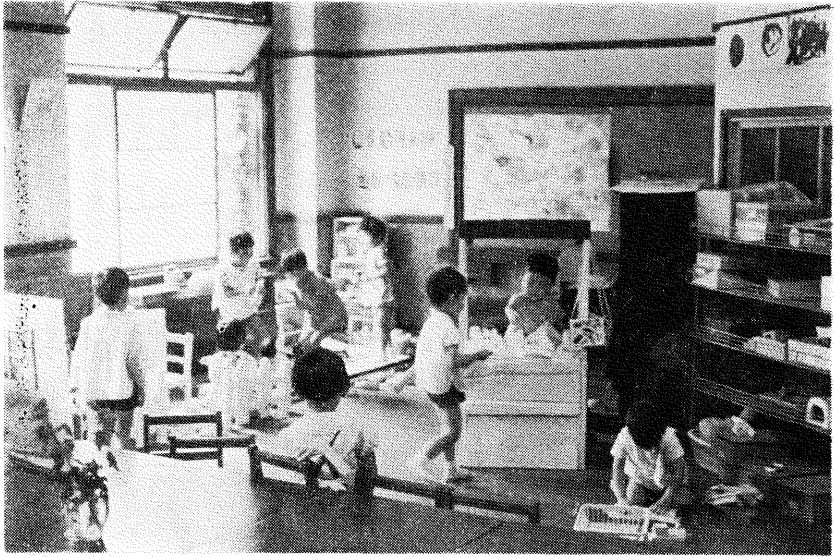
室内あそび

・男児三人、プラスチックの線路をつなげて汽車あそびをしている。そのうち鉄橋を積木で作りなどして汽車を走らせている。

・女児三人、ままごとでごちそうをつくったり人形をだいたり、人形に食べさせたりなどしている。

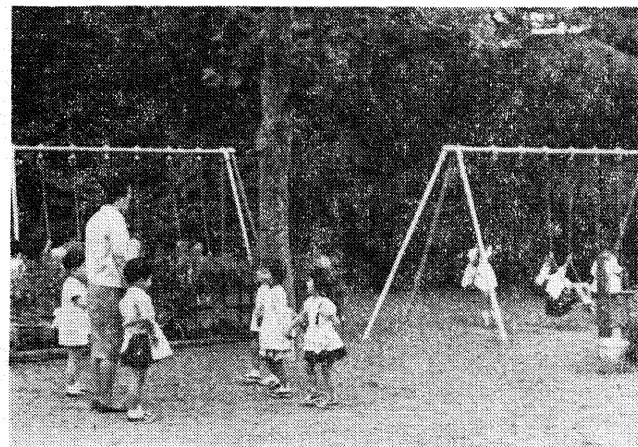
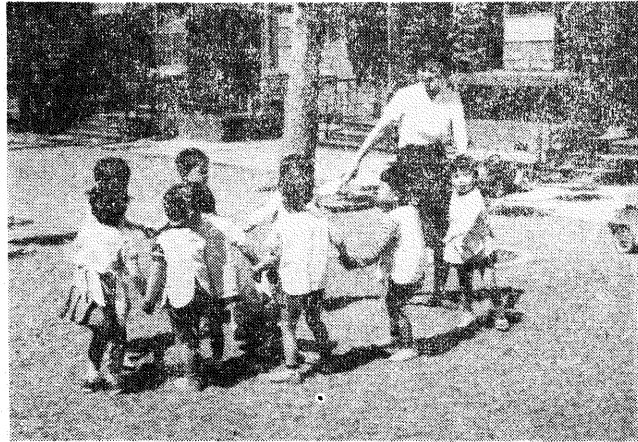
戸外あそび

・女児二人、砂場でおだんごをつくったりアイスクリームをつく



たりしている。
 ・男児三人、女
 児三人、教
 師と共に
 山へ散
 歩に
 行

く、
 山の上
 のジャン
 グルジムに
 登って隣の
 学校が見えたの
 でよろこびの声を
 あげる。草をつんで
 山をおり、うさぎやモ
 ルモットに草を食べさせ
 る。



・山に行つたグループは、帰つてきつてから自動車、フランコ、砂場にかけて遊ぶ。

最近フランコが一人でこげるようになった五、六人がよくのつて
いる。この組で一番平令の幼い丁夫が、自動車にやっとかわりあつ
て乗れるようになったので、ほめて自信を持たせるようにする。

十時頃にままごとをしていた女児が昨日つくつた風車で遊びまし
うというので、教師と共に七、八人で風車をまわしてかけっこし
たりして遊ぶ。この間にも砂場で遊んでいた女児が後から入つた友
だちに道具をかしてあげないのでその指導をしたり、男児二人で道
具のとりあいからけんかがおこる。一方の男児が泣いて要求を通せ

うとするので、その仲裁をしたりもする。S子は、まだ教師が遊びのグループからぬけるといっても遊びをやめてしまうので、これからの長い指導が必要である。

十時四十五分頃から、ゆうき室にいてリズムをして、学級としてのまとまった時を持つ。十一時二十分頃から、おべんとうを頂く。

午後はおべんとうがすんだ幼児

から自由あそびに入り、砂場で山をつくったり、汽車を走らせたりごちそうつくったり、自動車ごっこをしたりしている。教師と共に花いちもんめをして遊ぶグループもある。

一時のレコードの音楽と共に、みんなが並んでハトホッホ体操をし、園庭を行進して、遊具をかたづけ、一時二〇分お帰りになる。

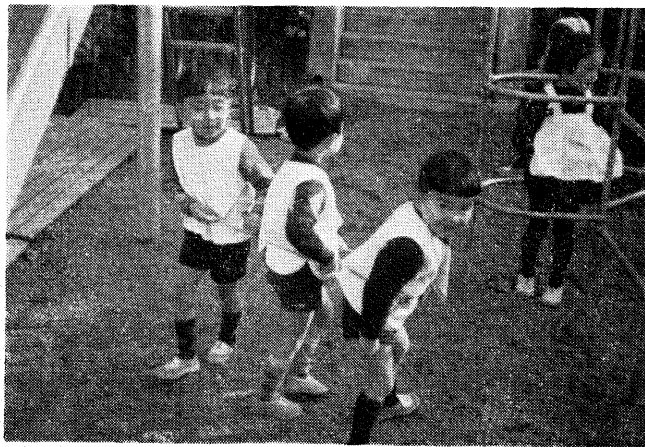
○十一月上旬のころ

秋晴れのもと戶外遊びの盛な毎日である。好きな遊びでは小さいグループでよく遊べるようになった。好きな友だちが砂場をする

11 月 頃



その仲よしの幼児が砂場の仲間に入るようになってきている。近頃は、鉄棒が盛で毎日のように興味をもって遊んでいる。興味のある遊びは上達も早く、教師や友だちにできるようになった動作を得意そうにしてみせる。教師がちょっと手をかしたり、助言したり、ほめたりして、女児全員参加してある時間遊ぶ。





この時期になると、幼児たちの自然の遊びを観察して、いろいろな遊具を使ったり、いろいろな遊びの経験をもたすように誘導することが必要になってくる。

とくに運動具を使つての遊びなどは個人差のはげしいものである

から、機会をみての誘導やはげましが大切である。

今日はブランコにあまりのらない男児三人を教師がさそい興味をもつように仕向けて遊ぶ。これからも何回かこういう機会を持たなくてはと思う。

今まで元気だったU子が、この二、三日登園してきてしばらく教師の側から離れないし、ちよつとしたことにも泣いて不安定の状態を示すので、今日は、U子の好きなおえかきにさそう。マジックで色模造紙にえをかく。えをかきはじめると、U子もにこにこしている。三回ぐらい交たいして、マジックで好きなえをかいた。

あそびにもグループの交流が少なくてできてきて、今日はままごとのグループの幼児が、うりやさん（やさしい、果物、本やさん）に買いにいったり、自分の家に届けてもらったり、ごちそうに呼んだりして遊んでいた。教師は、楽しくよく遊んでいる幼児たちを認めて声をかけたり、ほめたりすること

も大切である。

午後、七、八人で教師と共に鬼ごっこをして遊んだが、鬼になって不安でやめてしまいそうな男児をばげまして、遊んだりしてだんだんに遊びの簡単な規則を理解させるように努めたりもした。

○二月下旬のころ

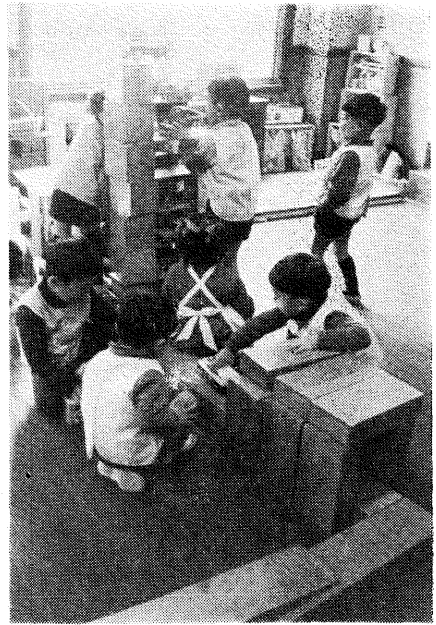
「がらり」と元気に保育室の戸があくと同時に、二、三人の幼児が声を揃えて「おはようございます」と言いながらとびこむようにして部屋に入ってくる。早速、おべんとうや牛乳のあたためてもらうものを所定の場所におき、バスケットを棚におくと、手を洗いうがいをする。

すぐに遊具の方にゆく幼児が多い。この頃は幼稚園にきたら、なにをして遊ぶかという意識をはっきりもってくるし、友だちを待って、いっしょに遊ぶとする。続いて次々と幼児が登園してくる。

「高速道路ごっこするものこの指とまれ」の男児の声にさぞわれて、五、六人が集まり、ここをこうしてと相談して、早速、床上積木を使って駐車場や高速道路をつくりはじめる。

ここにはトネルがあった方がよいということになりトネルもできる。駐車場に自動車置かれる。一階、二階、三階と数えている幼児もいるし、一階は誰の自動車と相談してわけている。上部階にはエレベーターで自動車を上げてゆく。

2 月 頃

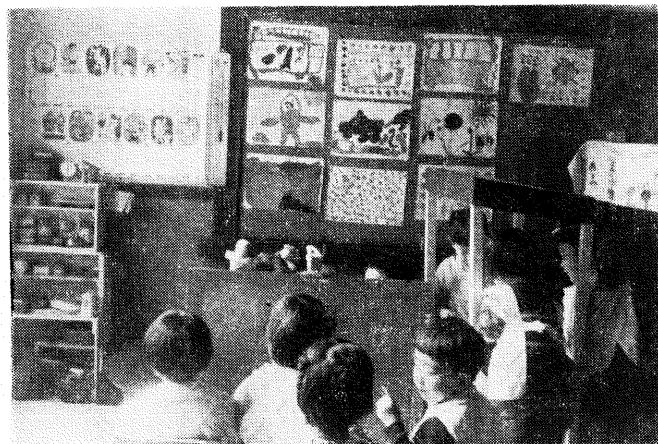
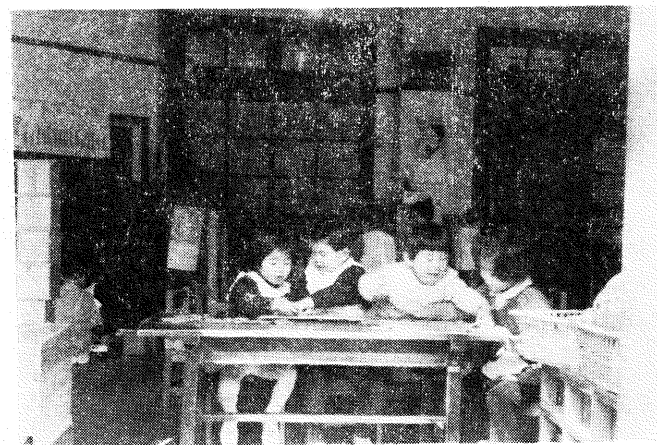
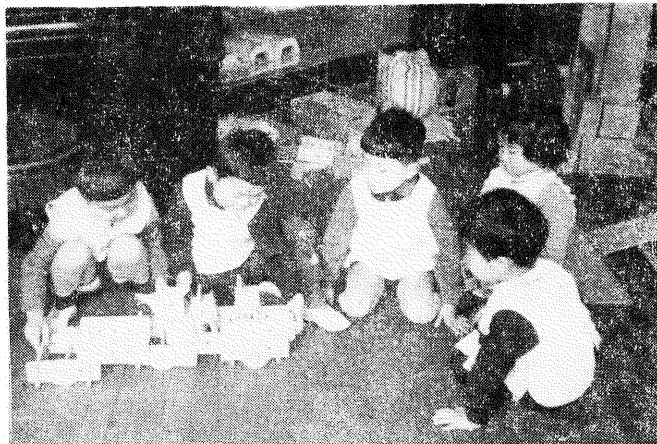




道路ができないうちに自動車を走らせ、道路づくりがききだと注意をうけている幼児もいる。

この高速道路あそびは室内遊びの盛な、近頃よく遊ばれている遊びの一つで、はじめのうちは自動車のための道路づくりだけのきわめて簡単なものであったのが、高速道路にはトンネルがあったというので加えられたり、すぐ近くにモノレールが考えられる日もあり、また変った車庫や駐車場や飛行場ができる日もあり、トンネルの中に照明をついたりしていろいろ工夫している。

参加する幼児も四、五人から、多いときには級の全員が参加した



ときもあり、遊びの継続時間も長く、いろいろ発展して楽しく遊んでいる。

教師は幼児がおもしろい遊びを工夫したときなどは機会をのがさず共鳴したり、ほめたり、助言したりすることや困っているときは相談相手になるなどの配慮も必要である。

昨日のつづきのくみ板やくみ木を使つての自動車つくり余念のない男児もいる。

同じころ、引き出しから女児が帳面を出してきて、えをかきはじめた。二、三人の女児と二人の男児もえをかく。さく曲でなくいろいろなものが描けるようになったので、興味も深まりよくかいてい



る。パズルをしている女兒もいる。えをかき終った四人で忍者ごっこをはじめ。隊長月光、三か月、輪月と役割をはっきりわけて遊んでいる。テレビの影響でこの忍者部隊月光とか、こちらはM一号、応答せよとかいろいろ再現して遊んでいる。ときどき教師も仲間に入れてもらって遊んでいるが、なかなかついてゆけず困ってしまうこともある。

パズルをしていた女兒がリーダーになりまごと遊びが始まる。高速道路の仲間の男児がお父さんで昼間は仕事に行き、夜はままごとの家に帰ったりしている。ままごともはっきり役割をきめて遊んでいる。ままごとの子どもたちが学校にでかけ、学校から遠足にでかけたりなどして、グループ間の交流も盛である。

なんとなく遊びに入りにくい子も、今日は元気にままごと遊びで活躍している。

十一時近くなり、あそびに発展性がないようすがみえてきたので、お片付けをして、ピアノの側に集り、歌をうたったり、ハンドカスタを使って楽器あそびをする。

十一時三十分頃からおべんとう。午後は自由あそび。
一時より体操。一時二十分お帰リ。

×

×

×

この組も四月からはいよいよ四才児で新しい友だちも入り、もっと多ぜいの友だちと遊ぶわけであるので、幼児と共に教師も期待をもって新学期を迎えたいと思っている。

いろいろなながれ



村田 修子

○ながれ

毎日の保育のやり方について一口にいうと、どこまでも子どもの活動を中心に行っています。それに伴って、先生の側の計画や準備やくふうがきれながら、明日の、また一週間の、またあるまとまった期間の計画ができていきました。

けれども、たとえば一週間の計画の中の「あした」の計画は、その前までの子どもたちの動き方や展開のしかたによってかわってきますから、必ずしも先生の敷いたレールの上をすべっていかなくたってしまふことが多いのです。

こういう、子どもの活動を中心とした扱い方をはたから見ると、「つかみどころのない・とりとめのない・けじめのない…」というような感じに受取れるでしょう。けれどもこういうのはこびの保育の

やり方だからこそ一日を振り返ってみたとき「きょうはよく流れた一日だった」とか、逆に「流れ方がまずかった…」という反省がびったりとするのです。

これが子どもの動きを余り考えずに、計画したとおりに、先生が中心になって引張っていくのであったならば、計画それ自体はいつもよく流れますし、内容としてあげられている六つの領域も落ちがなく繰り込むこともできて、先生としては満ち足りた感じを味わうことでしょうが、立場を逆にして子どもの側からみた場合は必ずしも子どもの活動が楽しいふん囲気のうちにすすめられたり、また次の活動に発展する意欲に満ち満ちたよい流れが見られることは少ないのではないのでしょうか。

ですから、先生の計画の中で、または自発的に、子どもたちがせいっぱい楽しく活動し、その中でいろいろの経験をしながら、年令相應の事柄を身につけていくことが気持ちよくできたときに、そしてまた多くは組単位に一日の保育が朝から帰るまで、つかえたり途切れたりすることなく、子どもたちの活動が展開されたときに「よく流れた」というようにつかいます。このことばは、ひとくちで本当にびったりと表現することができます。

前に述べたように「一日の流れ」という使い方がよくされるわけですが、このほか「流れ」には一年間の流れとか、子ども個人についてみた場合などいろいろな見方の流れがあるわけです。

たとえば、四才のとき新しく入ってきたAさんは、三才のとき

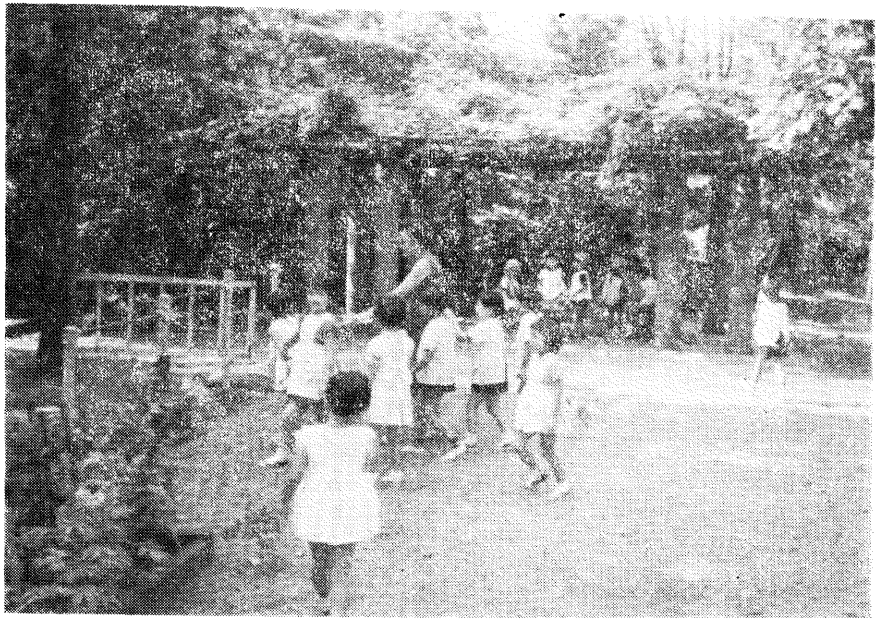
に通っていた幼稚園では先生の指導するとおりに模範生として生活していたのに、当園にかわつたためにその指導方法の違いに不安でたまらず、活動しなくなつたり、雨をふらせたり、親から離れなくなつてしまいました。暫くそういう状態が続きましたがこういうやり方に慣れてきた二学期からは、前に増して活発になり、人がかわつたようにいつもにこにこ何にでも自分から積極的に當つていくようになりました。

これなど流れが途中でとまり、時期をへてまた順調に流れるようになった、ということが出来ます。

そこで現在の自分の組の子どもたちについて、受持ったときから今までのいろいろな場面での流れをあげてみます。

○三年保育のとき

女児七名、男児八名でしたが、みなそれぞれ個性のはっきりした入が多い組でした。けれども、「家庭と余りかわらないふんい気の中で楽しく集団生活に慣れさせ、一人ひとりに自分をせいっぱい出させる」という大きいねらいに向つて進む流れにのれない人はなく、いよいよそれぞれの持ち味がおもしろく展開されていきました。適当に三才児らしい夢をもっているのに加えて、さすがに現代っ子であることをいろいろの面で感じさせられました。三学期に入つてからはその流れがよくいく日が多くなり、余り問題がありませんでした。



「せんせい、せんせい」

○四才児になつて

四才児になると、前からの人に女十一名、男十名の新しい人を加えた組ができあがりました。

四月中は前からの人と新しく入園した人とがなかなかうまくいかないで、子どもの活動の流れがいくつにもなりました。また、先生の計画のもとに「うまくいった」と思っていた保育の流れが、自分のことを聞いてもらいたくして席を立て出てくる人や、時をかまわず水道のところへ水いたずらにいく、というような個人々の勝手な行動のために一瞬にしてくずれてしまうことの方が多い状態で毎日がくれました。

五月に入ると、興奮状態で過していた数人の人たちも次第に普通に近くなり、集団生活というものがいく分わかったようすも示すようになりました。それでもその流れは前からの人と新しい人に分れ、遊べる人たちは園のなかじゅうせましとばかり動きまわり、遊べない人たちは先生の前後左右にくっついてまわりました。(写真①)

六月も半ばをすぎると、生活全体が軌道にのってそのテンホはゆっくりですがまあまあ普通に流れることが多くなりました。この頃の気持ちよく流れた一日に例をとってみます。

○よく流れたある日

五月十六日(土) 朝きた人から風車を作り、そのあとそれで遊ぶ予定。

九時十分前頃すでに登園していた五人ぐらいの人の前に風車を置く。それをみつけて関心を示したので、すぐその機会をとらえて風車の話しなどをして製作にとりかかる。次々と登園してきた人は手洗いやうがいすませたあと作っている人のところへよってきて、自分にもできそうなことや、作ったあと遊ぶ楽しさや自分のものにしたという気持ちから次々と製作へ参加してくる。そして風車のでき上った人から庭へ出ていき、走りながらまわっている。はじめの頃は製作する人数も手頃なので扱い易いが、だんだんに手がまわらないほどの人数になりほとんど、全員が自分たちから「それを作る」といい出して参加する。自分の風車を持った人は得意気に庭に出て、「自分のが一番よくまわる」などと走りまわっていたが、運動量の大きいことや、たまたま気温が急に高くなってきたために、涼しいへやに入ってきて、まだ風車を作っている人と並行してそのかたわらでグルーフごにいろいろの遊びが展開され出す。

・人形劇の小さい舞台で三人がしきりに人形を動かしては、見物やうの人に見せている。

・その傍では人形劇の切符売場を作った二人が小さい紙に色鉛筆で何か書いていて、切符を買いにくる人に売っている。

・ブレイヤの置いてある机の前に男の子が四人こしかけて、同じレコードを何度も繰り返しかけては楽しんでいる。(写真②)

・女の子二人はその曲にあわせてハンドカスタややらずをならしながらレコードにあわせて、大変自由に、思ったとおりのダンスをし



て楽しんで
いる。

・その傍で、
ダンスをす
るのは恥か
しげな女の
子三人が楽
器をならし
て伴奏をし
ている。

・このあいだ
に風車ので
き上った人
たちは庭や
廊下や遊戯
室で風車ま
わしに余念
がない。

時間半、兎角うまく流れないことの多い五月半ばとしては、グルー

プ遊びがとてもうまくいっている。
けれども、さすがに十時半頃になると、早くでき上った人たちが

あきてきたらしい空気が感じられてくる。そこでみんないっしょにかたづけをして、遊戯室に行くためにへやに集まる。順々に一列にならんでいくわけだが、みんな自分が一番になりたいので、なかなか一列になれない。ときどき自分を押えることができない人が走り出す。「そういうことはいけない」と思っている人たちが大声をだしてとめる。そういつたざわざわしたふんい気だが、「遊戯室にいつてなにかしよう」とみんなで一緒にすることを楽しみにしている気持ちがよくくみとれる。ここでは先生の計画のもとに音楽にあわせて体を充分に動かす。きょうは一番大好きなスキップをするのに、片手を持ってやったので、いつもと違った新しい経験が案外おもしろがられて、「もっとする、もっとしたい」といい、予想したよりも一層興味深げである。十一時十五分にへやに戻り、十分後に玄関でさようなら。

字として書いてみるとたいして目新しい一日でもないのに、日誌の片すみに「近頃で一番ころよい日」と書いてあるのを今みると、いかに四才児のはじめの時期がむずかしいか、よく流れることが少ないかがあらためて思われます。

私共としては、先生の計画と幼児の活動があいまって毎日がよく流れるようにいつもいつも心掛けているのですが、そこにいろいろななががあって、先週は調子がよかったのに今週に入ったら何事もすべてうまくいかない、という時があります。

○よく流れない経験

夏休みのあとから気候のよかった二期の前半は、友だちとのむすびつきが深くなったし、外での遊びも活発にやられていたし、保



あ
や
と
り

育の計画もまあ具合よくはこんでいました。ただ朝きてから遊びに入っていくのが今まで経験した人たちよりもゆつくりなので気になってはいましたが、活動が始まると大変活発ですし、創造的な遊びにも発展するので、「みんなスロースターター

なかしら」などと実習生とじょうだんをいっていました。

ところが二期の末近くスチームが通り出し、へやの中で遊ぶ機会が多くなった頃、朝きて手洗いやうがいをするまで、遊びに入るでなく、自分のいつも遊んでいる相手がいるのを待つように入らだつて立っている人が前よりも一層目につくようになりました。庭の遊具でならまあ不自由なく遊びに入れる人たちまで、みてみると、きてからへやの中を二十分位はぶらぶらあるきまわって、すでに遊んでいる人の遊びを見てもわたり、私のまわりをいって、机によりかかっているのです。その結果おもしろい経験をしました。

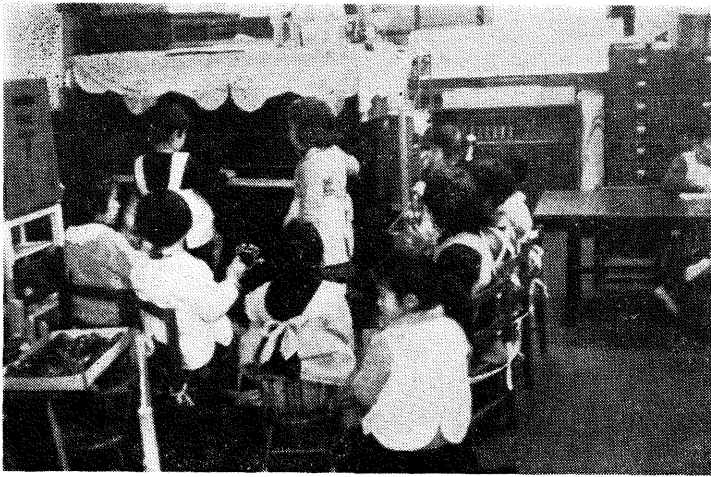
その中の女の子の一人が紐をもってきてあやとりをしました。するとそれがだんだんに遊びに入れないでいる女の人の間にひろまって、いろいろなあやとりができるようになりました。それが遊べる人の間にまで広がって、毎日のように紐をねだられました。いままで受持ったまん中の組で、これだけあやとりあそびがはやって、しかもじょうずにやられたことはありません。

いままでにこういう遊べない人が一組に何人かはいる経験を持っています。ところが、こうたくさんそろったのははじめてでした。特に一年の半分以上をすごしてきたこの時期に、こういった状態が再びあらわれてきたのは驚きました。

自分からすすんで遊べなかったり、遊びの中に入っていけないのですから、逆に先生の側からの保育計画はたいいよく流すことが

できました。

その時期にした「おもちゃやさん」の用意をしたときの例をとってみますと、私が紙や箱を朝いじっていたりしますと、多くの人が



みんなで合奏

「それなりにするの」とか、

「それしようか」というようなことを順々にいってたりして「これをさせよう」という計画に大した苦勞なしに大部分の人がのってき

てくれてしまうのです。

けれども私はこのような先生の計画による流れよりも、子どもの

自発的な活動がよく流れる方がずっとうれしいことで、貴重なことだと思えます。

〇ころみ

そこで三学期のはじめに次のようなことをやってみました。朝きたときのふんいきをかえることがぜひ必要だと思ったからです。四人ぐらいになったら子どもにおもしろいことをいかけたり、おいかげごっこをきっかけを作るようにして、へやの中で鬼あそびなどをして、わざとがさがさとしたふんいきになるようにしました。その効果は予想したよりもずっと早くあらわれて、あとからきた人もうちとけたふんいきのためにすぐに遊びに入れますし、その新らしく入った人たちを加えて一団となって遊戯室や廊下などへ出ていくというように活動の範囲も広くなりましたし、グループの人数もふえてきました。

これを考えてみますと、結局朝早くくる人たちが割合に口数の少ない人だったことや、きちんとした性格の人や、まだよく遊べない人であったことなどが原因となっていたための結果だったようです。一年たつたいま、やっと普通の姿になってきました。この先、こういうよどみのないように、毎日々の流れや個人々の流れ、また集団としての流れがうまくいくように願いながら、そして流れなくなつたときは早く原因をみきわめてそれをとり去るようになっていこうと思っています。

四才児の一日

村石京子

○はじめに「一年前をふりかえって」

その前年は三才児の級であったので、十五名でゆったりと一年間を過してきた。そして四月になって四才児の級になり、三十六名にふえた時の、部屋いっぱい子どもたちの顔でうずまった新学期最初の日の部屋の中の情景が今も鮮明な印象で残っている。うれしそうに顔、はつきりした顔、緊張した顔、心配そうな顔、さまざまな表情で一ぱいであった。

この大勢の子どもたちが幼稚園にきて、家庭に在るのと同じように楽しく、やりたいことを心ゆくまでやり、話したいことを何でも話しあっていく日が一日も早くくるように願ったことを、つい昨日のように覚えている。

まず第一に心の緊張をほぐし、一人ひとりが充分あそべるように

したい、そしてのびのびと楽しく過せるようになったら、今度は級としてのまとまりをもちたいなどと、いろいろな思いが胸に満ちるのであった。しかし、教師はこういう気持ちで保育にのぞむのであったけれど、それが実現の運びとなった日は、はじめのうちはごく少なかった。

新入の子どもの中に必ずみられることだけれど、新しいことにつかると不安定になる者が今度の級にも数名いた。友だちとうまくあそべなくて心細くなる、腰かける時いがみつかからない、クレヨンの箱がひっくり返ってしまった、後から友だちがおした、はきかえる靴がすぐ見つかからない、おべんとうが全部たべられない、予防注射がいやだ、小さな事件は前ぶれなしにつきつきとある。そんなことがあるたびに、はりつめていた心の緊張の糸がフツンと切れてしまったように、どうしようもなく泣くことが最初のころはよくあった。けれどどういう人たちもやがて幼稚園の生活になれ、次第に友だちができて、友だちとあそぶことが楽しくなっていくうちに、小さな出来事はお互いにかまんしていったり、困ったことがあっても自分たちでその処置を考えていくように成長するのが楽しみでもあった。

一方三年保育からの人たちは前の一年間で園の生活習慣やきまりは一応身につけ、教師や友だちとのつながりはできたものの、四才児の級になって急に大勢の級になったことに不安定を感じる者もあつた。また、今までのようにひろびろとしたスペースで、玩具を数

の上からも充分使ってあそぶなくなって、勝手がちがってしまったり、遊具や玩具を今までのルールに沿って使ってくれない新らしい友だちのことや、さまざまなことでやはり初めは困惑したことも多い毎日を過していた。

しかし、だんだん日が経ってみんなの生活が何とか軌道にのってくると、大勢の級の中でいろいろな友だちとあそんだり、いろいろな経験をする楽しさもましてきた。記録をみて、こんな状態であったことを思い出しながら、その頃一日をどうやって過していたかをふりかえってみよう。

.....

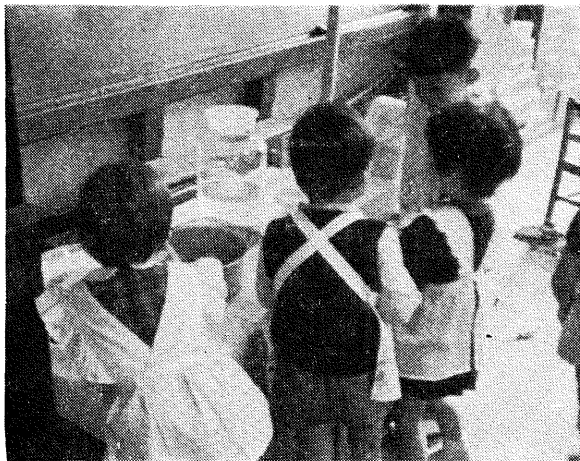
○五月末日のある一日

・九時 登園

登園時間の早い子どもが数人、八時半少し過ぎになると元気に「おはようございます」といいながら部屋へ入ってきた。子どもは手を洗ったり、うがいをしたりする。私は「Ａちゃんたちはいつも早いわね」と話しかけたりするかたわら、部屋をいそいで整える。数分のうちに、また何人か登園してくる。まだ母といっしょに部屋にきて挨拶をうながされている子どももいるし、ＯとＮのように手をつないでとびこんできて「僕たちいっしょにきたんだよ」とうれしそうに報告する者もいる。

Sが父に部屋まで送ってもらって入ってきたが、父がSをおいて

いこうとすると心細げな表情をしている。私はSと父の関係を、Sと教師とのつながりに移行するため、Sのそばへ行って手をつなぎながら、保育室で飼育しているおたまじゃくしやぎりがにを見に行つた。そこでは五く六人の子どもたちで話がひとしきりにぎやかにはずんでいる。「おたまじゃくしね。しっぽが少し短くなったよ」「足も出てきたよ」「あら、ほんとう」「あ、こっちのも」「えびが



おたまじゃくしやぎりがにをみる

にがはさみふりにあげたよ」「ぎりがにだつてばー」Sも、はじめはだまっておたまじゃくしやめだかの泳ぐのを見ていたが、やがて仲間に加わって話をしだした。

その間にも幾人か登園。次第に人数の多くなった保育室の中

つみ木・絵本・木製の汽車などであそびがあらちらこちらではじまった。庭へ出た子どもたちはブランコ・ジャングル・砂場・自動車など思い思いの遊具であそんでいる。子どもたちは楽しそうに遊具・運動具であそんでいるけれど、まだ友だちとあそぶということ自体よりも、中心的なのは、物つまり遊具がおもしろいからあそぶというようすがみられる。例えばIとKと他数人で自動車をおしていたと思ったら、「Iちゃんばかり乗って僕はちつとも乗れないよ」と口をとがらせてKが言いにくる。Iに「代りばんこね」と言っていると、今度は部屋の中でNとAが何か言い争っている。「僕がつなげた汽車をNちゃんがとるの」「だって僕、たりないんだもの」友だちとあそぶことがあそびの中心なら、玩具の方はお互いにゆずり合う気持ちがあるけれど、今はまだ玩具が珍らしく大事なので、なかなか友だちにかせないのだろう。しかし一応双方の言い分を聞けば、あとはたいして悶着なしにまたいっしょに遊びを続けるというのも、子どもだからできるのであろう。

一番おそく九時三〇分頃登園したK子や、私が部屋にいると何となく傍にいるM子・A子などを誘って山の長いすべり台をしに行った。カーブのある長いすべり台がおもしろくて、みな何回も並んですべる。Mはかいだんを上るのがちょっとまわり道なので、すべり台のすぐわきの生け込みを上ろうとしたが、規則違反というので几帳面なIにすぐとめられる。

「信号が青になりました。すすめです。赤です。とまれ」とすべ



お山のすべり台やつりわであそぶ

砂場あそび



りながらやり出したら、すべり台の途中でストップすることがおもしろくて、かいだんを上ったりすべったり、上ったりすべったりと熱中している。私もいっしょにおもしろく遊んでいるうち、つりわたぶらさがっていた子どもたちが「つりわ高くして」と呼びにきた。つなを短くして、少しつりわを上げてあげる。暫くすると今度は「先生、お山へクローバーとりに行かない？」とN子やK子たちが誘いにくる。「それじゃ、おままごこのうちのかごをかりて行き

ましよう」とかごを持ってつみ草に行き、初夏の太陽をいっばいにあびてひとときを過す。つみ草をしたたり、蝶を追ったり、ジャングルのてっぺんに上って遠くを眺めたり、思い思いあそぶので「先生はちょっと下のお庭の方たちが

何しているか見てくるわね」と言って、私だけおりてきた。

砂場の人たちのようすを見に行くと、「あら、あら、お水いっばいじゃない。まあ、お靴が泥々。あら、Kちゃんは顔まで真黒よ」と思わず大声がでてしまったり、ふきだしてしまったり。砂場に熱中していた子どもたちは、言われるまで気づかないで水をどんどん注いで工事していたけれど、お互いの顔を見ると泥だらけなので顔を見合わせ、ちょっとてれくさくなった。

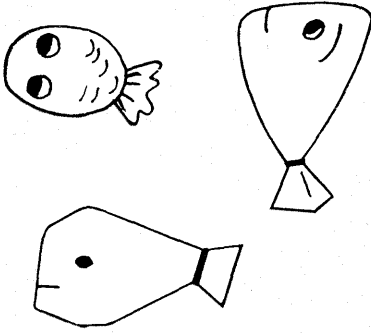
・十時過ぎ 絵をかいたり製作をしたりする。

砂場の黒ン坊連中を部屋によんで、汚れた前かけをとったり靴下を変えたりし、手や顔もタオルで拭くとさっぱりときれいになった。その間、部屋で絵をかいていたT子たちをみて刺激されたKが「お絵かきしよう」と帳面とクレヨンをだしてくると、他の子どもたちも「僕も」と続いて、白山画帳をとりだしてきた。私は、先にはじめていたT子たちの絵をみたり、そこに日付けを入れたりする。

さんさんご思い思いの遊びが展開しているので、その間に私はこの間からとりかかりだしていた水族館あそびのための製作活動の一コマとして、今日は寝袋利用のさかなをつくろうと、そのための材料を机の上にひろげはじめた。時間は十時少し過ぎである。二つ連ねた机にビニール被をかけて、マジックインキ、ビニールテープ、空袋、ハッキング、モールなどをだした。ままごこの場からそのようすをみていたN子は「何するの？」ときいた。「あのね、この袋でお

魚つくっておさかなつりしてあそばない」とN子だけでなく他の子どもにも誘いかける。Y子やMたちはすぐに「やる」「作る」ととってきたのに、N子は私の行動に関心を示したにもかかわらず「やらない」という。おやおやと思いつながら「どうして？」と聞いても「どうしても」という理由。この子は二年保育から入園した子どもだが、まだ目が浅いので絵画製作の面の興味は出ていないのだろうか。

もう少ししたらまたまた誘ってみようと考えて、先ず机のまわりに集まっている数人に、つくり方を説明しながらいっしょにやり始める。空袋の中にハッキングをつめてある程度ふくらみをもたせ、次に魚の胴体としっぽの部分の区切りができるようモールか輪ゴムでとめてから、マジックインキで目や口をかい



空袋利用の魚

たり、色をぬつたり、うろこをかいいたりする。

比較的、地のきれいな絵がらの空袋を選

庭であそんでいた女兒が五、六人入ってきて、「何つくるの?」「やりまーす」と言って製作をやる意欲を示すので、その人たちにもつくり方を説明する。

一方、先にとりかかったグループではぼつぼつでき上る人たちも

あり、「できた」

「私の、赤いお魚」

「私の、青いお魚」

よ」「もう一匹つくろう」「私も」

「あのね、この前の日曜日ね、お父

さまと水族館に行

ったら、きれいな

お魚がいっぱい

わよ」「僕も前

に行ったことある」

と自分たちのつく

った魚を中心とし

て話はずむ。

魚が幾つかでき

ると「お魚はどう

する?」「お魚つ



製作・お魚をつくり

できた魚を釣ってあそぶ



りしたい」という声も聞え、床をつみ木でつり堀をつくってそこへ魚を入れ、つり竿やあみを出して、魚つりあそびがはじまった。「つれたー」「わあ、大きいつれた」「やらせて」などにぎやかに

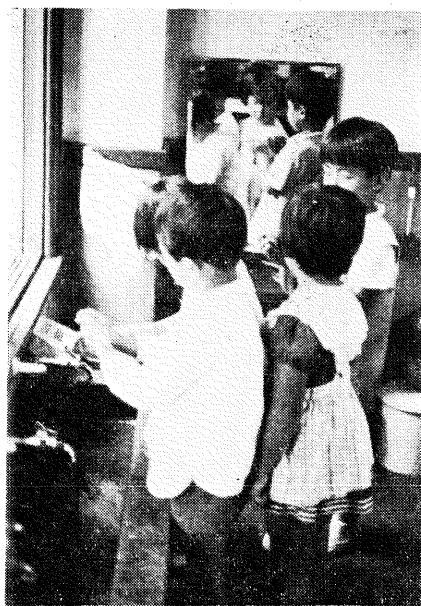
なる。庭であそんでいたグループもその頃部屋へ入ってきて、つり堀の方へ「やらせて」とか製作の方へ「お魚つくる」と集まってくる。できた子どもには後始末をするように促がしたり、いっしょに片づけたりする。N子はみながおもしろそうに魚をつっているのので、だんだんやりたくなってきたらしいが先程やらないとはっきり言ったので、ちょっと具合いがわるそう。でももう一度すすめると、今度はうれしそうにやりだした。おとなしいE子は何となくもじもじして、みなのつくるのをみている。「Eちゃんもお魚つくってね」というとこっくりとうなづいた。この子はまだこちらから働きかけないと、やりたい気持ちがあっても自分からは積極的な行動はとれない。

でき上った子どもたちは、魚つりをしたり、また庭へ出てあそんだり、部屋で黒板に絵をかいいたり、つみ木やままことなどをしたりしている。

・十一時三〇分頃部屋を片づけておべんとうの用意をする。

ひとわたり製作も終りになった頃「お片づけしましょう」とみなに知らせ、製作でバックインキがいっぱい散らかった床をはいたり、セロテープやマジックインキを所定の場所に片づけたりする。マジックインキはふたがとりばなしでどこかへ飛ばしてしまっているものもあるし、紙くずも乱雑に散らかっている。

自分のはさみとかクレヨン是比较的よく片づける子どもも、まだ共同のものを仕末する意識は少ないし、四才になって日も浅いから

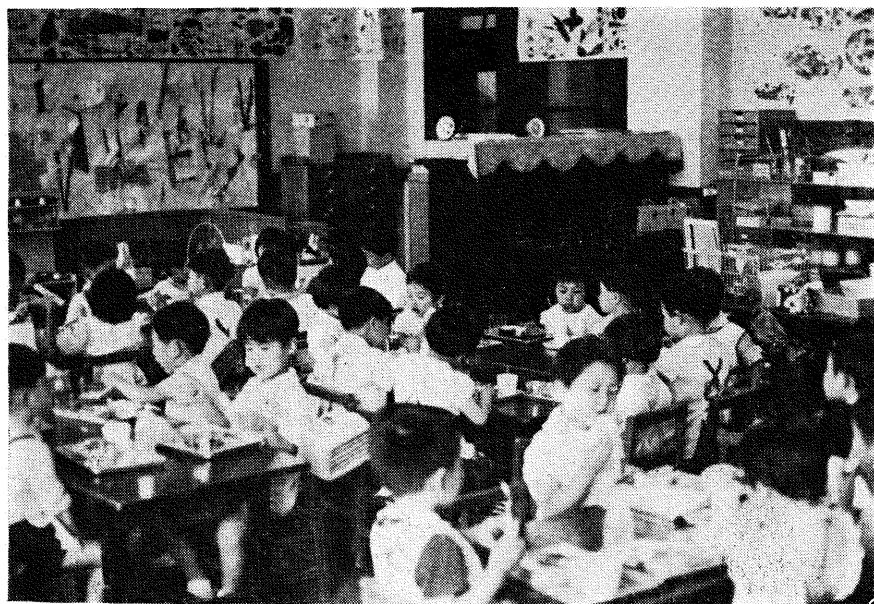


食事の前に手を洗い、うがいをする

無理はないと思うけれど、それにしても大勢だと随分散らかすことと妙などころに感心してしまう。

それでも散らかす人も多いけど、片づける時も大勢である。十分もすると部屋はきれいになったので「おべんとうにしましょう」と声をかける。「林の組、おべんとう」「おべんとう」とはずんだ声がひびき、並んで手を洗い、うがいをしてバスケットをとりに行く。水道のところで「Yちゃんがおすの」「ちがうよ、Hちゃんだよ」という声。また、にぎやかなこと。

私は机の上をふいたり、おぼんを配ったりする。「先生、おぼんくばらせて」とよってきた数人に「これ、Tちゃんよ」「これはMちゃんよ」と名前を知らせながら、配るのを手伝ってもらう。突



楽しいおべんとう

然A子が大声で泣き出した。バスケットを持ったまま、坐るところがないといって泣いている。泣き声が大きいので他の子どもがびっくりしている。よく探せばちゃんと椅子は空いているのに、困ったことがあると問題解決を考えず必ず泣くA子、いつまでもこれが続いたら本当に困るのに……。

A子の座席をみつめてあげて、おべんとうのつづみのほどけない人のを手伝ったり、お湯や牛乳をついであげたりして、やっと準備が整った。

声を揃えて「いただきます」私もいっしょに食事をしながら、みな楽しそうに話すのを聞いたり、相づちをうったりする。

.....

食事のすんだものから、はをみがき、後片づけをしてまた各自あそびだす。Kは早くすんだYに「パトミントンとっておいてね」と頼んでいる。「いただきます」をしてから十分位で食事のすむものもいれば、いっこうにはかどらない子どももいる。食事に要する時間は随分さまじまだ。これは幼稚園だけではなかなか変えられないので、家庭とよく連絡をとっていかねばならない問題である。

やがて8位の子どもがおべんとうがすんで庭や室内であそびだすと、U子は「もうたべられない。のこす」と言って落ちつかなくなってしまう。U子のおべんとうの量は多すぎる程ではなかったはず。友だちがあそびだしたので食事をつづけることに気持ちがい

はとぼっぼ体操



なくなってしまうためであろう。「もうちよっとだからがんばっていただいてね。Y子ちゃんもまだいただいているわ。二人ともがんばってね」とはげます。

庭であそんでいたS子たちが「先生、花いちもんめしない？」と誘いにきた。

「もうじきU

子ちゃんたちがおべんとうすむから、そうしたらいっしょにあそぶわね」「じゃあ、お庭にいるからきてね」と言ってまた外へいった。私はまたおべんとうのおそい子どもをはげましたり、おぼんの後片

づけをしたりする。

みなが食事がすみ、後片づけも終わったので先程の花いちもんめのグループに入れてもらったり、鬼ごっこをしたり、鉄棒を手伝ったりする。やがて一時になるとレコードがなった。

・一時 体操

このレコードは体操の合図であり、四方八方から子どもがかけてきて、それぞれの級の前に整列する。ほとぼぼ体操をしてから、その後少し庭を歩いたりする。

・一時三〇分 帰園

ままごとや砂場などのあそび場所をみなで片づけてから、帽子やバスケットをもってきて帰りの支度をする。

全員が席についたところで今日つくった魚をみたり、「きれいな魚」のうたをうたったりして後、「さようなら」の挨拶をして帰る。私は子どもを玄関まで送り出し、迎える母にわたして今日の一日の保育は終りになった。

.....☪.....☪

ここにのせたのは、一学期の中のある一日の流れである。この日は突発事故もなかったし、一学期としてはスムーズに流れた方かもしれない。

教師は計画をもっているも、子どもの側がなかなかそれにのってくれないことも最初のうちは多いし、今なら笑ってすませるような

ことも、はじめはお互いに気持ちの通じ合いが少なく、勝手がわからなくて、些細なことで流れが中断してしまったり、横道へそれたりもよくあった。

やがて一年が経ち、五才児に成長する子どもたちは次第に友だち関係も高まり、教師とも親しみがまってきた。

しかし二学期も三学期も、一日の保育の流れというものは、ここにあげた一日と同じような経過をへて流れていくことに変わりはない。ある一日はとても気持ちよく楽しく運べることもあるし、ある日は二三人がこの主流から違う方向へ流れていってしまうこともあるし、またある日は全体の流れがどどこおってしまう出来事があったりする日もある。

どうしても四才の時期はまだ子どもも形がきまらず、いろいろ変りやすい年令であるし、教師の側もこういう子どもたちだから計画通りを重んじて先ばししてはいけないと思うし、そう思いすぎてある面は足ぶみをしていることがあるかもしれないし、方向づけがむずかしい年令である。

学年末になって何とか一慮みなも安定し、生活のリズムもできてきた。原稿を書きながら、年長組になったら、教師の計画によって進行する保育の流れ以外に、四才児の経験を基礎として、今度は子どもの側の発意によって高まっていくいきいきした保育の流れがもつたい。教師はアドバイスはするけれど主流は子どもたち自身によって運ばれる日、そんな日をもちたいとふと思うのである。

五才児、一日の流れ



堀合 文子

幼児の生活は、その園へ入園したその日から流れ始める。その流れは、初めは細いせせらぎにも似るものだが、幼稚園生活が活発になるにしたがつてその流れは、ドードーと音を立てて流れる。その流れは一日流れてまた次の日へ、また次の日へと流れていく。年齢によってその内容は異なれども、その流れはほとんど変らない。三才、四才、と教師中心の生活をしてきて、五才児になると、幼児の社会生活が盛になると共に幼児中心へと移行していく。

○日常の流れ

- ・朝、登園してくると靴を取り替え、コート、帽子をかけて自分の部屋へくる。
- ・挨拶をして手洗い、うがいをする。

- ・自分の好む遊びをはじめる。
 - ・友だちも登園してくるので大いに生活（遊び）が展開される。
 - ・教師のその日の計画がある時は、その幼児の生活の中に入れていく。幼児の生活は終始続けられているのであるから、教師は機会をみつけてグループで指導したり、個人に指導したりする。
 - ・幼児は交代して計画に参加する。その日の中に参加できない場合は次の日に参加する。
 - ・教師は、その計画の指導のみでなくもちろん幼児の自由なあそびの指導もそれぞれの場においてする。
 - ・いろいろな経験習慣を機会をとらえて、その場その場で指導する。
 - ・かたづけをする。
 - ・おべんとうをたべる。（大体午前十一時半頃より支度して、はじめめる）
 - ・済んだ人からあそぶ。
 - ・レコードの合図で集り体操をする。（午後一時）
 - ・部屋、自分たちの園での分担の場所のかたづけをする。
 - ・帰る支度をして帰園する。
- 一日の主な流れは以上のように、前述したようにこの流れが入園当初より流れはじめ、五才児になったので特殊なことのない限り、この流れは一日一日流れ、くり返えされて次第にその流れは内容も

豊富になれば活動も活発になってくる。幼児の活動をうながす合図があるわけでもなく、おべんとうの時または用事のある時は、友だち同志、またはその日の当番が呼びあつて生活は流れていく。

幼児の生活は五才児になれば特に教師が指示をしなくともスムーズに流れていくが、やはりスムーズに流れるには三才なり、四才での間の教師の働きかけや、あそびの指導というものが大きな影響を示してくる。

日常の習慣となつてしまうことはもちろんだが、五才児以前の教師の幼児への働きかけや、あそびの中の指導、あそびの指導ということが大きく反映してきて、幼児自身の内容にも及ぼしてくる。

五才児になつて一日の流れもスムーズにいくから、教師の計画のみ遂行すればよいと思うが、また五才児は五才児なりにまた一歩前進しなければならぬので、計画の指導と共に、あそびの指導も常におこたつてはならない。

○ある一日（四月）

午前八時三〇分、幼稚園について部屋をのぞくともうT君と、Yさんはお部屋で絵をかいていた。お姉さんと一しよにきたらしい。早速、窓をあけたり、靴箱をだしたり、机をふいたり、朝の準備をしていると、ぞくぞくと「おはようございます」と元気よく入ってくる。お天気がよいせい叫声もはずむ。みんな庭へ吸い

こまれるようにとんでいく。絵をかいていたT君、Yさんもかたづけて後をおいかけた。朝の準備もできたので私も外へでると、もう腕まくりして砂場はダム作り、夢中になってやっている。女の一部の人はすべり台のところへごきごきして何やらまごごらししい。

もう私が部屋でごしゃごしゃしている間に外では一日の生活がはじまり、はじまり——

「すてきなダムね」「うんこれ、ここからこうすると水がでるのだよ」「先生、みて、ここ、こんな深いの」「先生、腕まくって、この水おもしろいよ。ここ、こうするとしゅーっとなくなるのだよ」「先生、ちよつときて」「先生、たべにきて」「あら、おいしいこと」「はいどうぞ」「私のもどうぞ」「先生、私の家へあそびにきて」「何と忙しいこと。あの人にも、この人にも満足させてあげたい。たとえちよつとでも——」

「先生、箱ない」「どんな箱」「どんなでもいいの小さくても」「部屋に入つて一しよにさがす」「ああ、これでいい」「何ができるのかしら」「ぼく飛行機作るんだ」「すてきなのを作つて下さい」「僕にも箱」「これどうかしら」「うんいいよ」「部屋の中は絵をかいている女のひとその空箱でつくる人と。さっきの砂場はどうなったかしら」のぞくと、またまた、拡大して砂場一ぱいすばらしい工事。みんな夢中だ。「先生、お山にこんなのがあつ

たの” “まあきれいな先生、腕輪つくって” “つくりはじめる。
”もうみんなも作ってみてごらんなきい。いいのできるわよ”
”先生できたよ” “先生ゴムない” “あら、いい飛行機ね。よく
考えたのね。その尾翼のところをもう少ししていねいにすると、も
っとすてきね” “こんなものも何かにつかってみたらどうでしょ
う” (中略)

——みんなそれぞれよくあそんでいる。夢中で生活している。
Kさんも五才児になったら急にお友だちともよくあそんでいるし
何だか私もうれしい。今日はお話をきかせてあげようと計画して
あったのだが、それから歌を新しく教えようと。だけどこんなよい
お天気にとでもよくあそんでいるまたすばらしいものを、それぞ
れ作ったりやったりして——みんなのようすをみてこんなこと
を考えていて、ふと時計をみたらもう十一時すぎ。おべんとうに
しなければ……。お当番の人にたのんでみんなに”おべんとうだ
からかたづけましょう”と伝える。——自分の今日の計画はでき
なかつたが、これでよいのだ。それぞれみんな自分の生活、あそび
を十二分に生活していた。うたをうたうために、話すためにその
生活をちゃん切つて集めないことがどんなにみんなにプラスにな
ったことか。私は、うたったり、話したりしたことで大いに指導
したと私の満足感はあるが、幼児の生活の流れをちゃん切つて幼
児の収穫というものがはたしてどちらが有効か。彼らは彼らのあ

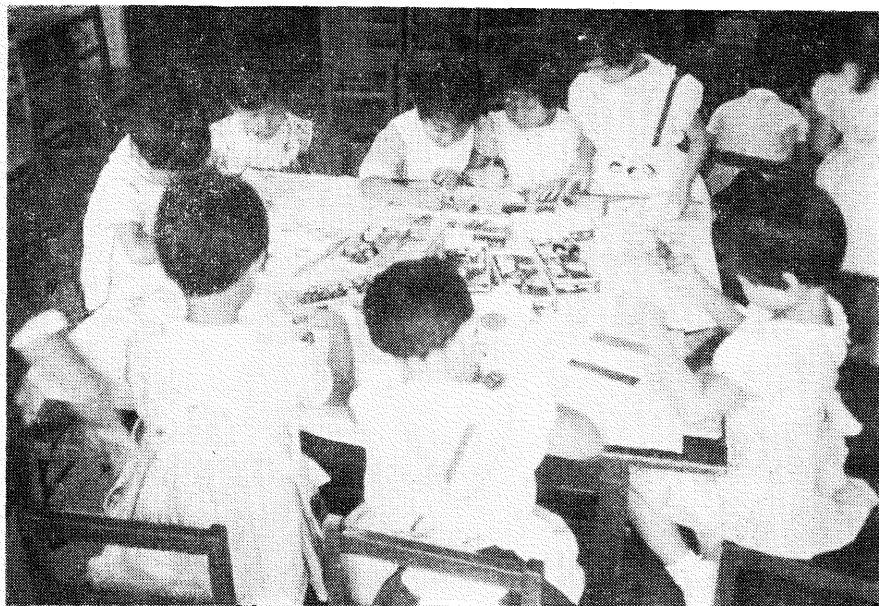
そびの中でおとなの指導よりはるかに大きな収穫を得ているの
だ——こんなことを考えながら私もおべんとうの支度をはじめ
た。(後略)

○一日の流れは次の日へと流れる

(六月のある日)

昨日から話合つて時計を作りはじめている。今日も、計画は時
計づくりだと考えて朝部屋をのぞくと、何とも私より先に時計
づくりが始まっている。”おはようございます” “早いね。も
う時計やさん” “うん、昨日のつづき”





「僕ね、今日箱もってきたの」

計画のルートにのせたのは私だが、昨日はじまった時計づくりも今日はもう自分たちから始められた。

その中登園してきたお友だちも時計をやりだす人、又横目でみながら外の砂場へ、ままごとへ、山へとあそびに行く人もいる。

時計づくりの人の指導、砂場での指導、ままごとへのお客さま。お山の草つみ、とまた忙しい一日が始まる。

その中時計もできた人は腕まくりしながら砂場へ、ごさを持つてままごとの仲間へ、砂場の人が手をふきふき、「僕もやる」「僕昨日のつづき」「私もやる」と選手交代である。

「何でつくりましょう」「私はこれ」「僕は考えたんだ。カレンダー時計」「こんなもの使ったら」「○○さんのはきれいな時計ね。花時計かしら」「先生、たべにきて」「はいちょっとまってね。すぐいくわ」「先生、ここ穴あけて」「はい穴あいたわよ。先生ちょっとごちそういただいてくるわね」（中略）

その中に十一時すぎ、中断するのはかわいそう位いっしょうけんめいそれぞれ生活をたのしんでいる。しかおべんとうなので、「またあした続きしましょうね」「僕今日つくらなかつたからあしたつくる」と砂場から手をふきふき入ってきた。（後略）

一日の一コマだが、その日の中に経験できなかったことは次の日にと、自分たちもちゃんとその生活の流れを上手に泳いでいる。

五才児になるとその流れは、むしろ大人である私共はともするとおいてきぼりになりそう。『先生こうしたらよい』『あしたはこうしよう』と幼児の中にその日の流れはその日で止るのでなく次へ、次へと流れてゆき、幼児たちがその流れを創造していくようだ。幼児はその流れをすいすいと泳ぎ、教師は後からみまもりながら泳いでついでいく。

砂場は砂場、ままごととはままごと、仕事は仕事の流れがそれぞれできていくようだ。その流れが入りまじって大きな流れになっていくのが五才児で、幼児自身、かたよらないようにそれぞれの流れの中を泳いでいる。たまにかたよった人がいる時は、教師がそれを調整するのが五才児の教師の指導の一つであろう。

○流れのせきとめ

幼稚園生活にはやはり集団生活なので、幼児からみると事務的な仕事が多たまある。園全体でおたんじょう会その他を一しよにするなど、幼児の生活の流れをちゃん切らねばならぬことがたまにある。午前十時からゆうぎ室でおたんじょう会というところ、いくら流れをくずさないようにと言っても集団生活をしている以上やはりこれは行動を共にする必要がある。しかしおたんじょう会などのようにたまにあるものはむしろ幼児も新らしさを味つてよいのだが、卒業期を前にひかえてくると式の練習とか、歌の練習とかやはり、いわ

ゆる練習を要するものが出てくる。

せつかく一しょうけんめい遊んでいると、『おあつまりー』と呼ばれる。何だろうと入っていると歌を教えられる。と次にはお免状いただく練習。また学芸会などある時は、げきや楽隊の練習。時にはそれに必要な製作。それがおわるとおべんどう。毎日毎日朝登園してくるとちよつとあそんだかと思うと、『おあつまりー』あとは部屋にかんづめ。おべんどう。午後から少し遊んでおかえり。毎日このくりかえし。気の毒だと心におもいつつやむをえずこんなくりかえし。そのうちにある朝、二人のおかあさまがみえ、『この頃家の子がたいへん帰る時ふくれまして、家へ帰ってもいららばっかりしてあたりちります』。家の子は熱をだし、つかれたつかれたと申しますのでお医者さまにみせましたらどこも悪くない、疲れでしようといわれ一日お休み致しました。

私は何だか心の中でおかしくなった。子どもは子どもの世界の中に泳がせなければ。魚が水の外に出すとぐったりしてしまふと同じ、幼児も幼児の生活の流れの中に泳がしてこそ、その本質を發揮して生き生きと生活し、生き生きと発達していくのだ。

私もはその一日の流れをくずさないように私どもの計画を折り込んで指導し、幼児の生活がよりたのしく、より豊かに、そしてその流れが深く、たくましく流れるように努力すべきだと、むしろ幼児から常に教えられる。

五才児の活動と教育内容の一環

関 治 子

五才児になると、幼稚園の生活経験がひろがり、幼児の活動も多面性をもってくる。

今年度は、オリンピック東京開催という、社会での特別の出来事があった。幼児の活動と教育内容が、社会の事象と非常に密接であって、社会事象と相まって、一つの流れをもっているという観点から、第一にかいてみようと思う。

第二は、幼稚園生活のしめくりともいえる卒業前の幼児の活動と教育内容の一環を記して、ここに幼児の発意をいかして、総合的な指導を進めていくことなど、ふれてみたいと思う。

一、社会事象との一環

運動会前後のリレーあそびが、テレビによって、各地の聖火リレ

ーが報道されてから、聖火リレーごっこになったのが、オリンピックあそびの第一歩である。オリンピック開幕と同時に、日に日に、幼児の活動は、オリンピックの影響がつのるばかり、そこで、その頃にと計画していた動物園ごっこを十一月にずらすことにした。十月九日の聖火リレーごっこに始まって、十六、七日頃に最高潮に、閉幕後の二十八日位まで、約二十日位、オリンピックごっこともいふべき活動の一環があった。

この間、強く感じたことは、幼児は、直接的に捉え、すぐに行動に移すことで、たとえば開会式をみれば、翌日はすぐにプラカードを一人がつくって持って、行列をつくり行進をする。重量あげが始まれば、重量あげ、体操が始まれば体操というように、時を移さず、行動にあらわす。おかし入れの製作物にまで、聖火台と聖火を模したものをつくったりした。二十日位の流れの中から、幼児自身のあそびの形となってしまうと、二月、三月までもあそばれているバスケット・サッカーあそびもある。

「ある一日」(十月十七日)

前日にひきつづき、登園した二、三人で、重量あげのパーベルつくりが始まる。組板で、ちょうど使い易い大きいのができる。昨日よりは、組板の円の数をふやしていく工夫ができたので、実際に重さを加えていく。重さが加わると危険にもなるので、広く場所をとってすることなど指示すると、まわりに客席をつくり始め、観客

バスケットごっこ



には女兒が大分入ってきた。今日は、点数をかいたものをおかけ、手に粉をつける場所をつくった。あそび方に、進歩、工夫がみられる。

砂場のグループは、棒高とび・走幅とびをはじめた。これも前日のつづきであるが、助走距離が長くなったり、木の枝を棒にして、走り、杖をつくようにしてふみきったりしている。

一方、サッカーをみてきた子どもが、何となくそれらしいあそびをしている。当の本人は、「僕、サッカーみてきたよ」と得意顔。

「あ、そうだ。サッカーしよう」とすぐに反応のある子ども、また、全然わからない子どももいる。そこで、教師も入って、子どもの知

サッカーごっこ



識と折りませながら、ゴールをつくったり、ゴールキーパーをおいたり、コート成形つくるなど、ごく簡易な準備やルールをきめつつ、共にあそぶ。

こうして、非常な興味を示して、工夫してあそぶグループと、そういうことに、関係なくあそんでいるグループなどあったが、教師

としては、それぞれのオリンピックあそびを含めたり、共にあそんで過した。

この日は、十月の身長体重測定をうける。皆が、こうしてあそんでいる中から、お当番が指図をして、身体測定と、自由あそびとが並行していく。男児・女児と交代する。組全体一斉ではないが、教師とお当番との連絡により、後片づけも並行して始まって、協力し合い、皆同時に終って、今度は帰りの支度をする。

また、別の「ある一日」には、やはり、継続したオリンピックあそびに、メダルづくりが始まって、教師としても、金・銀紙をだしてあげたり、余り関心を示さない子どもも加わってくるように、材料を出してみたりする。今度は、皆で揃って、ゆうぎ室にいき、音楽に合わせて、オリンピックの各種目の表現をやってみる。中でも、子どもの側から床運動と声がかかる。きれいな音楽に合わせ、思う存分、好きに動きまわる。

終りの頃、一番印象深いところを、絵にかかせる。開会式・重量あげ・マラソン・サッカー・ホッケー・バスケット・馬術・体操などのうち、女子体操は、赤のユニホームで、金髪の人や逆立ちなど、本当によく特徴を捉え、楽しんでかいていた。

このようにして、特殊な例ではあるが、こういう社会事象が自然に、幼児の活動に入りこんで、だんだんに整理のない形で、組全体にひろがり、共に一つの経験として味わって、また遠のいていく、実に自然な一つの流れであった。

二、卒業前の幼児の活動と内容の一環

卒業を前にしたひなまつりに、年長組は、例年、劇や楽隊などをしていく。

二月十日頃から、教師の計画によるこの活動の一環が始まった。年長組二組合併のうた・楽隊も、曲をきめて、うたい始めた。

組でする劇

などのために
題材をきめて
いくべく二つ
の話をする。

(めんどりと
パン・大きな
かぶ)

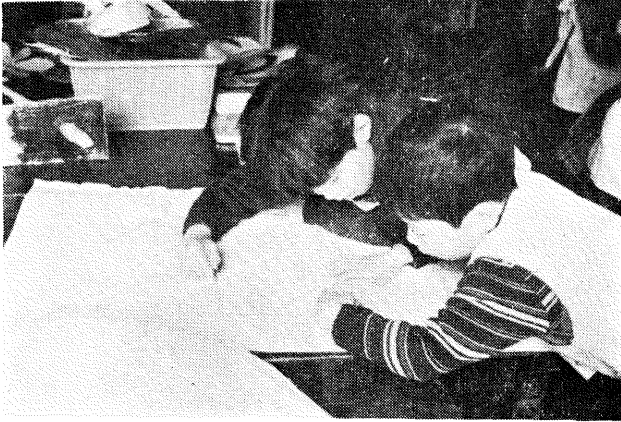
十一日、合
併で、楽隊を
やり始める。

楽隊の役割を
きめる。希望
による。人数
が多すぎる所
は、話し合い



劇の相談

小道具づくり



小道具できあがり



か、じゃんけんにより、他の役にまわる。

十二日、劇にした場合の雰囲気や伝えながら話をして、子どもたちに、前者の二つの話から、どちらを劇としてやりたいか選択させた。大半が、「大きなかぶ」がよいという。グリム童話をよみ、ロシア民話の大きなかぶの絵本をみせ、結局、ロシア民話の大きなか

ぶを劇にすることになった。

(ここで、教育実習・かぜ流行などで一週間ほど、中断してしまい、三月十日にこの会をもつことになった)

二十日、劇の方は題材がきまったが、もう一つを、絵話のようなものにしてはと考える、「小さいお家の話を、本の絵をみせながら、

もちかけてみる。これは、話の理

解としては、むつかしいと思うのだが、でてくるものが、ビル建築とか乗物で、身近に見聞きするものであることと、子どもが製作にとりかかり易いことを考慮して、絵話の形式で、絵の部分を大きくつくって、そして、言語的な表現をするようにした。

二十二日、二十六日いろいろの事情で間がとぶがこの二日で、二者のうちどちらか一つを選ばせた。大体、その時に登場物を、子どもたちときめていった。そして、希望者からきめたのだが、今回は、卒業前でもあり、希望者のない役などは、推せんさせてみ

た。結構、子どもも適任者を見ているのだと感心した。中には、好きな人の名前ばかり言う子どももいた。推せんされた子どもが、「やってもよい」と承諾したところで、徐々に、役をきめて、黒板に役と名前をかいていった。

二十七日この日から、小道具をつくり始め、大体三日位で、主なものをつくった。できた小道具を使って、少しずつ動作をしてみたりした。

三月四日から五日間、動作・小道具の完成・せりふなどと本格的に活動を始めた。

この辺の最も白紙のところから、劇・絵話へとつくり上げていく段階で、ある一日に重点をおいてみたい。

「三月五日」

朝のうち、自由あそびの子ども、お友だちに贈るえをかく子ども、小道具をつくっている子どもと皆、てんでに、活動している。十時頃、部屋の中を広くして、一方に客席をつくる。皆が集る。今日からは、劇のグループと絵話のグループに分かれて、やってみるので、片方のグループは、みてもあそんでもよいことにする。大半がみている、一しょになって、考えてくれる。

劇の方は、単純なストーリーのせいもあるが、登場順を、教師がきめて持ちかけると、それによって、でてきた子どもが、実に、個人差があつて、どんどん、とりとめもなく考えて話す子ども、さっぱり話さない子どもという。話す子どもは、これを何回かくり返し

ていくうちに、整理していけばよいが、話さない子どもに、どうしようかと思案してしまう。

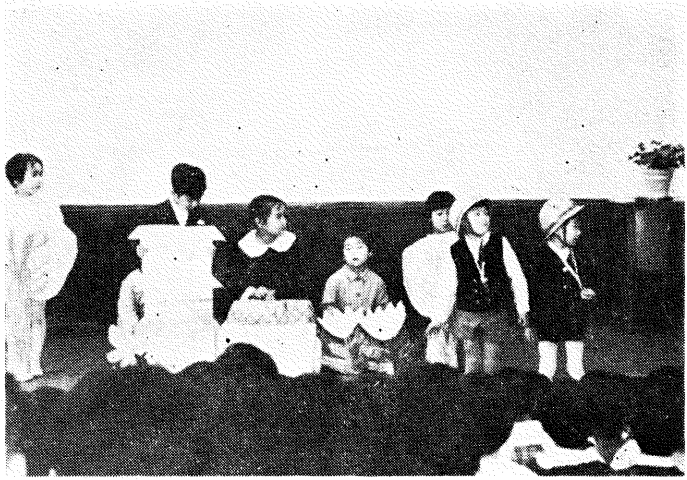
教師が、「こんなふうに言つてあげてもいいわね」という形で言つたことは、子どものことばとして、なだらかに入つていかならぬ。他の子どもたちに、「何と云つたらいいのかしら」ともちかけると、いろいろと意見がとび出す。その中から、好きな言葉を選ばせると、言えなかつた子どもも、翌日、翌々日と、だんだんに自分の言葉として、整理して話すようになる。

ことば一つでも、子どもからでたものは、こんなにも浸透していくものかと、恐ろしかったり、尊いものだと痛感した。

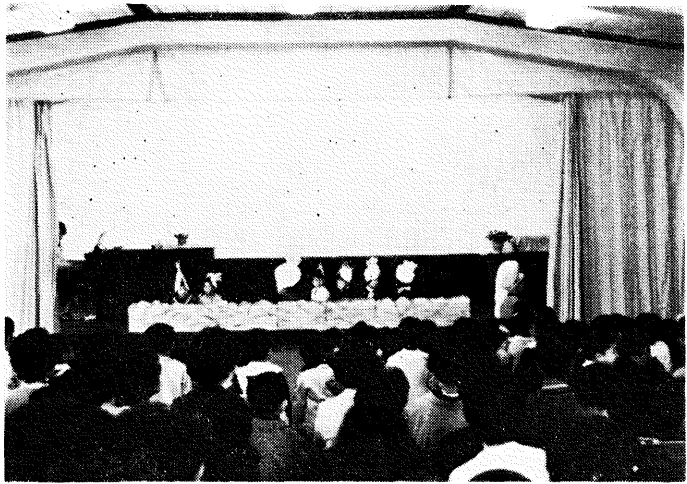
また、休んでいた子どもが、役割をえらぶのに、めんどりがでてくるところがあるのだが、「ひよこになるわ」と役を一生懸命考えたりした。この子どもにとっては真剣だったと思う。

絵話の方は、大きな絵をもって、その子どもが話す形式にしたが、こちらは、劇よりも動きが少く、言葉が多いので、次の場面へのつなぎに困ってしまった。——よく話す子ども、話さない子どもの差はやはり大きい。——すると、教師が考えていないことを、子どもが気づいた。

それは、工事場の人が、小さいお家のまわりに、大きい家を順々にたてていくのに、その度に、その工事場の人になる子どもがでてきて、「トントン」「ドルルルルル……」という。次々とたつていく、ビルや学校やデパートなどを、この工事場の人になる子ども



大きなかぶの劇



には、皆が、実に意欲的になり、協力体勢がでている。個人差があっても、助け合って、衣装をつける子どもには、手伝って着せてあげたり、また、お互いのを、よくみているので、お休みで欠員ができれば、積極的な子どもが、すぐに代役をつとめる。

ともかく、全員に、ことばを考えて言い、道具をつくり、実際に活動する機会をもった。

こうして、こういう一連の活動は、言葉が人前で言えるようになった、

小道具を一人で工夫してたという個々のことだけでなく、一つの大きな環の中にいて、一人ひとりを総合的に成長させるものではないかと感慨を深くした。

もにリードしてもらって、ピッピッと笛を吹いたら、ビルがたつと
いうようにしていけば、話がスムーズに運んでいくと、あらため
て、筋を運んでいった。

まだまだ、ほんの一部で、言いつくせないが、卒業前のこの時期

五才児の記録



三才児を迎えて

四月十六日 水曜日

遊戯室でリズムあそびをする。三才児も遊戯室にきて五才児のすることをみている。

「お花の種をまきますよ。」

と先生がぱつと種をまくまねをすると、先生が種をまく回ごとに子どもたちはあちら、こちらにどんでいく。

「遠くにもまきますよ。」

と先生は遠くをねらって種をまく。子どもたちは遠くにもとんでいく、そして先生はピアノをひきはじめる。

ピアノをひきながら、

「いっぱい種をまきましたよ。お日さまがぼかぼかとあたっていますよ。」と子どもたちをみながらピアノをひきつつける。

「芽がやつとでてきましたよ。」

先生はまだずわったままでじつとしている子どもをみて、

「まだ芽でない種もありますね。いまにでてくるでしょうね。」

子どもたちは先生のことをききながら、そしてピアノの音をききながら思い思いのかっこうをして、立ちはじめ。しばらくして、

「そろそろお花が開いてきましたよ。きれいなお花が咲いたわね。ひとつのきれいなお花もあるし、たくさんのお花もあるわね。」とピアノをひきつつける。

「いいお花にしておいてね。しずかにゆれているお花もあってい

今回は四月の新学期がはじまってから、五月初旬までの一か月間の記録を示す。五才児になって、最初の計画は、「三才児を迎えて」である。次の計画は「ベーブサート」であるが、これはあまり発展しないで終わった。五月一日から「子どもの日」つづいて、「春の運動会」の行事にはいる。

本号には、現場の指導者の側からの記事がいろいろ載っているの
で、それとあわせてみることによって、いろいろよく理解して頂
け
ると思う。とくに、堀合の「五才児一日の流れ」は、この記録と時
期も同時であるから、てらしあわせて見て頂ければ参考になろう。

磯部 景子
堀合 文子
津守 真

いわね。風がふいてもくちやくちやにならないようにね。

春がきましたよ。

お花がおどりだしましたよ。

お花の国のお姫さまや王子さまもおどっていますよ。

ちようちよもとんできましたよ。

お山の方から兎さんもとんできましたよ。

兎さんいろいろなことをしてあそんでいますよ。

かわい小鳥さんもできましたよ。

木の枝にとまっている小鳥さんもありますね。夜がきましたよ。」

ピアノの音がしずかになる。子どもたちは思い思いのかっこうをしてねむりはじめる。

その間、三才児はいすにすわってみている。三才児のクラスの先生が三才児にはなしかけながら、座ったままで五才児の子どもたちのうごきに合わせて、身ぶりをする。先生のまねをしている子どももいる。

四月二十一日 火曜日

遊戯室で三才児といっしょにリズムあそびをする。

「小さい方がいっしょにしましょうって。」

もうじきいらっしやいますよ。

おててをつないで歩く時、ぎゅっとないでね。あら、戸がしまっているわね。戸をあけてきてちょうだい。(遊戯室の出入口の

戸がしまっていた)」

五、六人の子どもが走って戸をあけに行く。

「まだこない。」

といいながら廊下の方をみている。

いすに腰かけている子どもたちも皆、廊下の方をみている。

「それじゃね、歩きながら待っていますよね。」

子どもたちは先生のピアノに合わせて歩きはじめる。

「雨が降っているから傘をさして歩きましょう。」

しばらく歩く。

「だんだん明るくなってきましたよ。雨がやんだらしいですね。

きれいなお花が咲いていますよ。みんなかわいいお花ですね。きれいな大きなお花もありますね。」

子どもたちはつばみになったり、手で花の形をつくったり、ふたりでひとつの花になったり五、六人が手をつないでまわったりする。みんないかにも楽しそうである。

三才児が先生に手をひかれて遊戯室に入ってくる。

「風がふいてきましたよ。お花がみんな散ってしまったのね。」

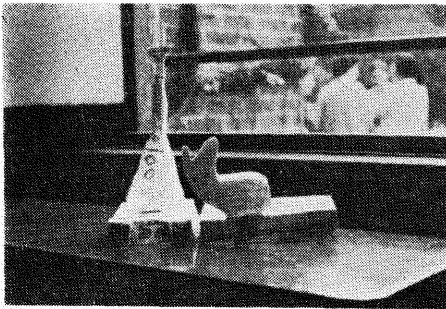
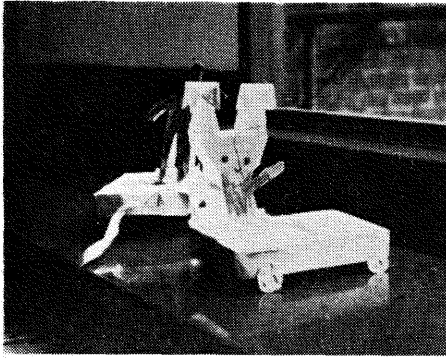
子どもたちの中には突風になったつもりで勢いよくかけ出すものもいる。また一方では体をくるくるまわしているもの、しゃがんで頭をうなだれているものもいる。子どもたちはそれぞれ工夫しながらピアノに合わせている。

「では歩きましょう。」

三才児も先生といっしょに五才児の中に入ってくる。五才児が両側から手をつないであげたりする。ちようちよの曲がきこえてくる。と五才児はみんなちようちよになる。三才児も手をひらひらさせはじめる。三才児のクラスの先生がお花になってすわると、三才児は次第に先生のところにかたまつて花になってすわる。五才児がみつをすいにくると三才児は不安そうな顔をして五才児の方をみる。次に三才児のクラスの先生がちようちよになると三才児は次第にちようちよになる。

五才児の子どもたちの中で花になる子どもがいる。先生や三才児がみつをすいにくる。

その後、小鳥になったり、りすになったりして、三才児と五才児



がいっしょにリズムあそびをする。

四月二十二日 水曜日

三才児にあげるおくり物をつくる。(写真上)

画用紙で箱をつくってふせて下に四つのくるまをつけて車をつくる。そして、ひっぱれるようにリボンをつける。車の上には画用紙で人形や動物や自分の好きなものをつくつてのせてのりづけする。

ペープサート

四月二十八日 火曜日

ペーベサートをつくる。ヨットと港ができあがる。

先生はペープサートを発展させたいと思っている。

机の上にペープサートが二本置いてある。保育室には空箱で何かをつくっている子どもが五、六人いるのみで、他の子どもたちは庭や山や子どもの家などで遊んでいる。ツベルクリン反応の検査がはじまるので先生は庭や山に子どもたちをよびに行く。検査が終つてひとしきり腕をみせあつた後今まで遊んでいた遊びにもどる子どもが多い。

ヨットを作る子ども

Tがダンボールの箱の底にしいてあつた一面がべこべこした紙を持って歩いている。

先生がTをみて、

先生「Tちゃん、その紙、何かになりそうね。」

T 「階段になるよ。」

先生 「そうね、それもいいわね。」

T 「まどでこういうときつかうのね。」

先生 「そう、それもいいわね。」

先生 ははきみで穴をあけているYに、

先生 「穴をあけるのはこれがいいわよ。」と穴あけ器をわたす。

T 「どうやろうかな、これ。」

先生 「どうやったらいいかしら。」

穴をあけてわり箸をたてているYに、

先生 「大きい穴をあけるとぐらぐらするでしょう。小さい穴をあ

なければね。セロテープでとめればいいわ。」

先生 はYがつくっているようすをみて、

先生 「あー そうするの。それでいいわね。」

どうやらYはヨットをつくるつもりらしい。先生のまわりに子どもが七人いる。㊦はみんながつくっているのをみている。

先生 「㊦ちゃん何つくるの。」

㊦は笑って先生のそばにいる。

Tは結局ヨットをつくりはじめる。

T 「海の中で泳ぎたいときはギー、ガチャン。」

などといながら箱の一面をきりひらいて窓のようなものを作っている。

ベープサートの置いてある机のところへ

S 「先生、何つくってもいい？」

先生 「何でもいいわよ。」

先生のまわりに三人の子どもが座る。

先生も絵をかきはじめる。

S 「なにかこうかな。鉄人かこう。いろんな形の鉄人をかいてやれ。」

と先生のそばに座って絵をかいているのがいかにも楽しいというようすである。

ヨットをつくっているところではTが窓をあけ終り、

T 「この中に食べものを入れておくんだよ。」

ととなりの子どもにいう。

女児がふたりTのまねをしてヨットをつくりはじめる。先生はT

のところ布の入っている箱を持ってきて、

先生 「Tちゃんたち、布もあるわよ。三角やこういう布、帆になるわよ。」

Tは布の入っている箱をさぐりはじめる。

先生 「ほらこういう布をはるときれいじゃない？」

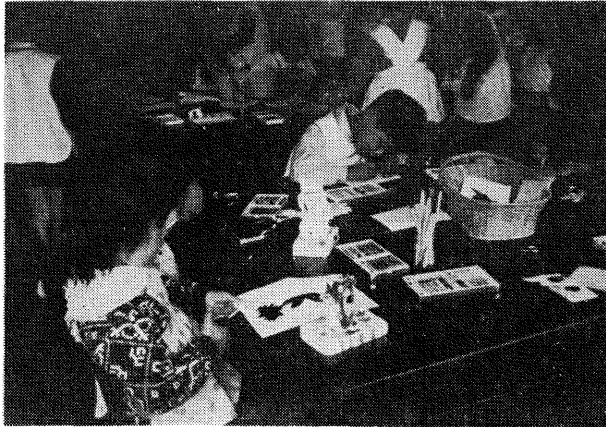
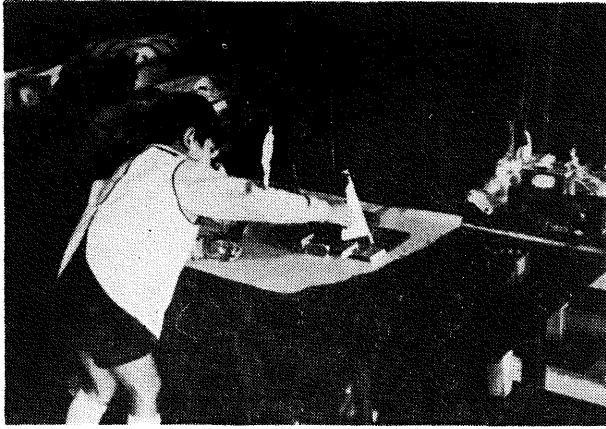
と帆柱にあててみる。先生もしきりに箱の中の布をさがしている。

先生 「ほら、こんなにいい布もあるわよ。」

Yも布をさがしはじめる。

先生は庭にいる子どもたちのところに行く。

ベープサートをつくっている机ではSが鉄人をかいている。



T は帆をつけ終り先生をさがしに行く。

T 「先生、ほら、ヨットができたよ。」

とみせる。先生はヨットをみながら色をぬった方がよいこと、梶み
たいなものをつけた方がよいことなどをはなしている。

T はヨットをぬり終り、

T 「うん、みなと、みなとかこうかな、箱で。」

と箱をさがしに行く。

T 「先生、これでみなとをつくる。」

といって黄色い箱をふたつセロテープでつなぎはじめる。先生はT
たちのつくっているようすをみて大きい青い紙を出してくる。

先生「できたヨットを海にうかべましょう。ここに並べてちょうだ
い。」

T「先生、みなとができたよ。」

先生「それじゃ、ここにみなとをつくってちょうだい。」
と青い紙を机の上にひろげる。

T「先生、下は色をぬる？ どうする？」

先生「くつついてみえないところはぬらなくてもいいわよ。」

Tは先生といっしょに港を青い紙にはる。

その後先生はペーフサートの棒をつくりはじめると、
つてわりばしでペーフサートの棒をつくりはじめると、
つてわりばしでペーフサートの棒をつくりはじめると、

しばらくしてお弁当の時間になりあちこちで片づけがはじまる。

つくりかけている子どもはつくりつけ先生は他のところから片づけ
はじめると、

昼食後でき上ったペーフサートを手に持って、ついたてをだしてきて、
クラス中大きわきになる。先生の意図では相当長い期間にわたってするつもりであったが、一度にもり上り、子どもたちはそれで満足してしまい、次にすすまなくなったので、ペーフサートつくりは一日でおわりになる。

子どもの日

五月一日 金曜日

鯉のぼりをつくりはじめる。

子どもの日までに鯉のぼりをつくる予定がある。目標としてひとりが二尾の鯉をつくってほしい。

朝、ちぎり紙をはった鯉のつくりかけが机の上においてある。その

の机のまわりに四、五人の子どもの集ってきて鯉をつくりはじめる。先生は紙を持って子どもたちのところに行く。先生は紙を半分においてまわりにいる一人ひとりの子どもに、ここに鯉を

二枚いっしょに切るようにはなしている。ちぎり紙をつくってもよいし、クレヨンでかいてもいいし、などとはなしつづける。紙の

大きさは子どもたちがこのくらいのをつくるといってくるのに応じて先生が準備する。先生もつくりかけのちぎり紙の鯉のつづきをつ

くりはじめると、子どもたちが入れかわりにつくっていて、結局半数くらいの子どもの鯉をつくった。

十センチくらいの小さい鯉から一メートルくらいの大きい鯉などいろいろな鯉ができる。

次に製作を中心にして一日の記録をおってみる。

室内で

Y「ね、先生これくらいいい？」

先生「あー、いいわね。その大きさとってもいいわね。」

E「先生、こんなに大きくなっちゃった。」

先生「いいわね。Eちゃんそれぐらいが。はるのをやってもぬるのをやってもいいわよ。」

E「お母さんははるのをやってお父さんはぬるのにしようかな。」

先生「それもいいわね。ずいぶん長い鯉で、はでにおよぐでしょう

ね。」

N 「先生ぼくもつくる。」

先生 「大きさはどのくらいにする？」

N はまわりでつくっている子どもたちの鯉をみている。

先生 「この位？ それともあれ位？」

N がまよっているので、

先生 「これくらいがいいわね。」と紙をおってN にわたす。

先生は子どもたちがのりをつかいやすいように小皿に入れて、子どもたちのところにおいてくる。またみんながつくりやすいように机を移動させる。

E が黒い紙をちぎり紙にしようこにしているのをみて、

先生 「こういうこいのぼりもいいわね。だんだんうろこがかさなるんですって。」と皆にみせる。

先生 「H ちゃんのもいいわね。S ちゃんのもかわいくていいわね。」

みんなよくできたわね。」と一人ひとりの鯉をみる。

K が庭から帰ってくる。

K 「ぼくもこいのぼりつくる。」

先生 「K ちゃんどのくらいの大きさにしましょう？」

K 「中くらい。」

先生 「そう、中くらいね。」と紙を出してくる。

①と②が遊戯室から帰ってくる。

E の鯉をみて、

③ 「先生、E ちゃんのようなのつくりたいの、紙ちょうだい。このくらい。」

と両腕を思いきりひらく。

先生 「はい。じゃ、③ちゃん、ここでつくといいわ。」

と紙をわたし机を二脚ならべる。

④ 「こどもをつくってもいい？」

先生 「いいわよ。紙に形をかいて二枚いっしょにきってね。」

と紙をわたす。

⑤と⑥がうろこにしようと思つた紙を同時にとりあげる。

⑦ 「わたしがみつけたのよ。」

⑧ 「わたしもみつけたのよ。」

と紙のとり合いになる。

先生 「あら、あら、どうしたの？ この色、ほらまだこんなにある

じゃない？」と先生は箱の中から同じ紙をさがし出す。

⑨と⑩は紙をみて

⑪ 「わー大きいの。」とふたりとも大よろこびをする。

先生は⑬がひれをつけているのをみて、

先生 「⑭ちゃんおもしろいものをつけたわね。おさかなにこういうのひらひらあるでしょう。⑮ちゃんよくおさかなをみていたのね。」

という。その他紙をまるくきって目のところを工夫した子どもや、口や尾ひれをいろいろに考えた子どもたちをほめて、皆にみせる。

EとTはぎつきから、ふたりでしきりにはなしをしながらつくっている。

E 「ぼくの方が大きいね。」

T 「ちょっとだけね。」

E 「ふたついっしょにつけると、お父さんとお母さんみたいだね。」

T 「ふたつつけるのに大きいひごがいるね。」

先生 「そうね。大きいひごも、ほら、あそこにあるでしょう。」

T 「ほんとだ、大きい。」とひごをみにいく。

Eは顔をあかくして一枚一枚うろこをはっていたが、とうとう途中で、先生のところに持っていく。

先生 「あら、すてきになりましたね。せっかくこんなきれいできているから、あした、つづきをしましょうね。」

と棚の上においておく。

Eはとぶようにして庭にでていく。

砂場 で

砂場ではYたちが毛虫をかこんで大きわきをしている。

H 「せんせいに持っていきようよ。」

Aがかけ出して先生にいいに行く。そして、くつをはくのももどかしそうに、足にくつをつっかけたまま走ってきて、

A 「さわっちゃだめだって。」

M 「これどくをもってるよ。」

H 「死んじゃうよ。」

A 「しゃべるでやろうよ。」としゃべるを持つてくる。

I 「かして。」

R 「かして。」

先生が子どもたちのタオルを持って庭にくる。

先生 「あら、かわいい、生れたての赤ちゃんの毛虫。その毛虫は蛾になるのね。ちょうちよになる毛虫はまた別の毛虫ね。」

と子どもたちのタオルを目にあたるようにして保育室に入る。

ばけつや丸太を出してきて砂遊びがはじまる。

㊦ 「はっぱを持ってきてあげたわよ。」

男児たちはしゃべるで砂山をつくり、頂上にくぼみをつけて、水を流す。

E 「水を入れるの、ちょっとまって。」

M 「かわいた砂をちょうだい。」

Rが、じょうろを砂山の横におき、わぎわぎ遠くまで砂をとりにいってバケツに砂を入れて運んでくる。

Mは砂山のふもとに横から穴をほる。

㊦ 「わたし、ほってあげるわ。」

砂山の四方からほっていく。

E 「ずいぶんおもしろいね。」

M 「あー、つづいた、つづいた。」

じょうろに水をくんできて、水を流す。

R 「わーつながった。つながった。」

次の瞬間砂山をくずし、丸太で砂地をたいらになでつける。

E 「こちらは工事中だから水を入れられないで。」

R 「こちらは駐車場。」

M はばけつでかわいた砂を運んでくる。

R は砂のはいたばけつに水を入れ、両手でこねはじめ。

E 「セメント下さい。」

とRのバケツをうけとり、砂地の上にどろどろの砂をなでつける。

E 「これ、おべんとう終ったら、すごいだろうな。セメントがたままって。」

このようにして砂遊びはおべんとうになるまでつづく。

一方Tたちは鯉のぼりをつくり終り野球をはじめ。

五月四日 月曜日

遊戯室で子ども日のお祝いがある。

女兒が三人先生といっしょに鯉のぼりをつくっている。先生は子どもたちが今までにつくった鯉を机の上にならべてひとりずつの鯉のくみ合せをみながら鯉の大きさや数に応じて太いひごや細いひごに鯉をむすびつける。先端に風車をつけて、次にふきなごしをつけて、鯉をつける。できあがった鯉のぼりを保育室のあちこちにかざっておく。十時より子ども日のお祝いがある。

春の運動会

五月六日 水曜日

春の運動会の練習

九時十五分から約一時間小学校の運動場に行つて運動会の練習をする。幼稚園に帰つてきて子どもたちは砂場、ブランコ、鬼ごっこ、絵をかくなどあちこちであそぶ。男児のHたちがままごとコーナーで食堂ごっこをはじめ。

帰園する直前にみんなであつまってレコードに合わせて、「オリンピック・マーチ」をする。去年の秋の運動会の時にした遊戯である。

先生にとつてもよくおぼえていて、上手だったとほめられて、みんなうれしそうに帰り仕度をする。

五月八日 金曜日

運動会

朝からまぶしいほどのお天気である。運動会のプログラムもすみ、五才児の「つなひき」四才児の「うさぎとかめ」三才児の「ちようちよと花」の遊戯がある。四月に五才児といっしょにしたようなことを、今日は三才児だけです。

※ ※

(つづく)

幼稚園では、その日の一日が重要視される。朝、子どもが幼稚園にきて午後帰るまでの時間は、幼児にとっては、一日の中でもっとも充実した時間である。この時間に、

幼児が自分の力を充分に発揮した喜びを感ずることができれば、幼児は一步、発達の階段をのぼったということができよう。それは、身長の伸びが毎日目には見えないが、一年たてばすばらしく伸びるように、毎日目にみえて変化することではないが、充実した毎日がつみ重なって、精神的な発達をしてゆくのである。もちろん、幼児にも、心の重くなるような体験もある。それは人間の生活にとって、避けることのできないものである。しかし、全体としてみるときに、自己を発揮できる生活が保証されていることが、幼児にとつては必要である。

幼稚園の一日は、この週の計画に、この月の、また、この一年間の計画によつて動く。けれども、どんなによく計画されていても、幼児がこの一日を充実して過ごすことができれば、よい計画もその効力を発揮することができない。幼稚園の一日の生活の中には、

・子どもの姿がみえなければならぬ。
・子どもが、活動していなければならぬ。

——先生だけがみえたり、プログラムだけがみえたりするのではなく。

・幼稚園には、一学期も、二学期も、三学期も、連綿としてつづく遊びがある。これが幼児の発達にとつて、思いのほか重要である。戸外の運動、砂場のあそび、つきあそび、ままごと、ごっこ遊びなど。その内容は一学期から三学期へと、より豊富になってゆくが、子どもたちが自分たちでやりはじめ、自分たちで展開してゆく活動である。その中には、先生がやたらに立ちいらぬ方がよい場合も多いが、これをただ子どもの自由に放置するのはなく、大きな計画の中にいれて、考えることが必要である。

そして、充実した一日のためには、教師の側に、一年間の抱負と、年間の見通しと、具体的な準備とを欠くことはできない。

本号は、「幼稚園の一日」が大半を占めている。幼児の幼稚園における一日の生活のもち方について、ご研究を乞う次第である。

(下)

幼児の教育 第六十四巻 第六号

六月号 © 定価六〇円

昭和四十年五月二十五日 印刷
昭和四十年六月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします。

申込書

フレールベル館
御中

昭和 年 月 日

なつのおともだち

②①
(年長用) (年少用)

冊冊

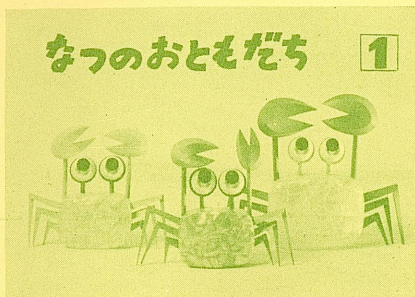
申し込めます。

(おなまえ)

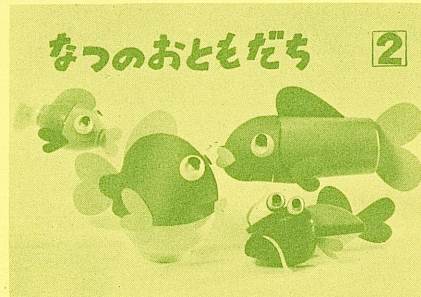
(おところ)

印

● 科学的で、実生活に即した内容の夏休み帳



① 年少用



② 年長用

なつのおともだち



● 今年のなつのおともだちは、幼児の身近かなテーマを利用して「くらべてみましょう」「ためしてみましょう」と呼びかけています。

● 図鑑形式の観察頁。言葉遊びや、数遊びのほか、実物の写真をとりいれたワーク。色紙を使った美しい工作頁など実に内容が豊富です。

● 付録は、子ども部屋に貼っておける美しい図鑑と、記録しやすいノート式の生活表で、これには、お母さま向けの記事が掲載されています。

(1) 年少用……………定価 70 円

(2) 年長用……………定価 70 円

お申し込みは最寄りの

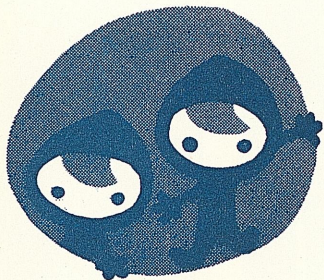
弊社代理店・出張所へどうぞ

発行 フレールベル館

フレーベル館の

現代幼児教育研究会

*新しい形の幼児教育講習会です



8月全国大会の 予告

会 期 8月8日(日)9日(月)10日(火)
 会 場 日光公会堂 (日光市西参道)
 内 容 記念講演・全体講座・分科会・
 レクリエーションなど
 予定講師 三木安正先生等・現代幼児教育
 研究会レギュラー10講師
 ゲストに女性教養の大家を予定
 会 費 500円 (資料代金を含む)

■詳細はフレーベル館本社「現幼研」係または 各地出張所・保育館にお問い合わせください。 主催 株式会社 フレーベル館

幼児のための
紙芝居です



●'65年度幼児テキスト紙芝居全集第3回配本中

年少向

お口のわるもの

¥380 画・水沢 研

年長向

かたつむりのおんがえし

¥380 画・上河辺みち

名作12集

くらげのおつかい

¥380 画・伊藤 悌夫

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17〔振替東京〕株式会社 教育画劇
TEL (341)3400・3227・1458〔29855〕

美しい絵と、格調高い文章で、幼い心にロマンと感動を誘う決定版!!

好評既刊

1. オオカミ王 ロボ
2. 灰色グマ ワープの冒険
3. ぎぎ耳小僧
4. 銀ギツネ物語
5. 峰の大将クラッグ
6. あぶく坊主
7. 裏まちのすてネコ
8. かしこくなったコヨーテ
タイトオ



トツパンの 絵物語 シートン動物記

全12巻—各巻 490円

- 全巻ご購入の方には、美しいカラーブックエンドを1組贈呈いたします。
- 詳細は、各巻に添付してございます。

東京都千代田区神田小川町3の1 TEL (292) 7781 振替・東京19640 株式会社
凸版印刷株式会社印刷

フレール館